

---

# プラタナスの樹に…

霧香 陸徒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

プラタナスの樹に…

### 【Zコード】

N7094D

### 【作者名】

霧香 陸徒

### 【あらすじ】

俺の名前は草原竜。高校2年生のただの男だ。とある暴力事件で転校する事になつた俺と転勤が重なつた家族。新しく住む事になつた町。神葉町。俺はそこで不思議な事件に巻き込まれていく…。

## プロローグ（前書き）

高校2年になつた俺。草原竜は、親友の隆史が怪我をするよつた暴力を受けてしまつた事に頭に血が昇つていた。

そして・・・

## プロローグ

「こへー♪ますゞワソノベー。」

「竜さん落ち着こへー。」

「なんで止めるんじや隆史ー。」マイナスの前の…」

「わかつりますー。わかつりますかいやめとこへートローニー。  
俺なんかの為に竜さんが…」

「退学せよ」

「…」

「教師を殴るなどあつてはならん事やぞ? わかつらぬならえん  
やが。…何か言つ事は無いんか? どうせこれから前とはお別れや  
からな。まあ話ぐらい聞こたるがな」

「…なんもありません。すいませんでした」

その日俺は高校を退学した。

事の発端は仲の良い友達がリンクにて、その仇敵にて全員し

ばき倒したって事件があつた事からだ。

友達の隆史は俗に言つ「不良」だったが心の優しい良いヤツだつた。

だから…

そしてその事が学校にばれた。

担任教師は俺に「暴力を振るつヤツは最低の人間や！」と罵つた。

そこまではいい。

事もあろうにその教師は…

「その隆史というヤツちやもどつせじょもないやツなんやう?

」

最後まで言わせるつもつは無かつた。

気が付くと全力で教師の顔面を殴りつけていた。

何度も殴りつけていると当の隆史が止めに入つて來た。

だか、止まらなかつた。

それだけの話だ。

「竜。引つ越すで~」

丁度父親の転勤が重なつた。母の故郷がある町へ引つ越すそつだ。

学校にも居られないでの丁度良かつたが、一応母から「今度同じ事したら教育的指導」と釘を刺される。

母の指導は…そこらの暴走族チーム一つより暴力的で実戦的で…要するに痛い。

俺と両親の三人は、関西の地から反対の関東の地へと向かう。

そんな道中の車の中で、俺は夢を見た。

時は3月の下旬

春はもうすぐそこまで来ていた。

草原 竜の章 第1話 樹の下の少女（前書き）

暴力事件で転校してきた俺。

新しい町では何があるのか少し気分が高揚していた。

時間軸不明

モノクロの空間の中で、俺はただ立っていた。いや、地面の感触は無いので少し浮いているのかもしれない。

何処かの公園のようで、大きな木が囲むように生えていて薄暗い。モノクロ調ではほとんど見えないと大差が無かった。

その中で丁度木々の隙間から光が漏れるのを狙つたように生える一本の木を見つける。

『行くわ。またな…』

そう誰かが呟いたのが間近で聞こえた。しかし、暗くて見えないし、気配も感じなかつた。

『私の…をよろしく…さん』

今度もまた違つた場所から聞こえてきた。始めの方は若い男のもので、後の方は女性としか分からぬ感じの声色だつた。女性では

無いのかもしねないが、やはり見えなかつた。

……………そして目が覚めた……………

4月3日(日) AM10・25

## 草原家新居付近

朝靄もそろそろ消えようという頃、涼しげな空気をバリアで弾く  
ように汗だくの男が一人白いワゴン車を押していく。

「まだかい…」

一人が呟いた。もう一人は黙つたままである。

「おっさん何か言わんかいっ！ 誰のせいやと思つとんねん！」  
と、罵声をあげているのが草原竜<sup>クサハラ リュウ</sup>。16歳の高校2年になつたばかり、少し田付きが悪いだけの青年である。

その隣で死にそうになりながら無言で車を押してしまったのは彼の父だつたが家庭内の地位は底辺に位置する。

「 もう少し……で……あの青い屋根のトコまで……」

やつして車を押して数分後…

「 はあ～……やつひとつと着いたでえ……」

あからざめに肩で息をしながら、力無くそつと、竜は嘆息した。横を見ると完全に衰弱してる父。

「 もうちよつと前に押さな道の邪魔になるやう一竜…」

「 わ……わよか…」

ショートカットの前髪がぐつしょりと濡れでいるのに顔をしかめて弱々しく呟いた。ところで今まで関西地方に住んでいたので当然の如く関西弁を喋る。父も同じだ。

竜はその関西の学校を退学になってしまったので編入するためにここに越してきた。竜達が立っている街。神葉町へと…。

そして、新居へ車でやつて來たのだが…。

「 しつかし、なんで壊れたよのポン」「…はつーはつーはああああいつーーー」

その言葉と共に田の前の車をガンガンと蹴る。振動に揺られて悲鳴を上げる車と父。

「 ああー…まだローン一年残つとんのーーー」

「まあ、あなたの安用給じや仕方無いけどね…」

車の中から厳しい声が聞こえて来た。中に乗っているのは竜の母親。草原 美樹だつた。ちなみにまだ35なので若い。

しかし、実際の年齢より10程若く見える程プロポーションも衰えてなく、なにより、童顔だつたので年と共に艶が増した程だ。

それと、先程から情けない声を上げて居る竜の父。草原 蒼風。印刷会社に務める35歳。

と。三人がこの街に来たのには理由がある。

竜は編入。父は仕事場の転勤。母は里帰り。偶然にも一致して新たな新居を構えて引越して来たのだ。

竜は編入が決まった時に一人暮らしを主張したが、見事に却下された。

「どうでもいいけど、着いたんやから、はよ降りろや！」

いつまでも車内にいる母に、竜はイライラしながら怒声を浴びせるが…。

「疲れるからまだ降りない。それにまだ着いてないでしょ？車を隅に寄せないと駄目なんだから…」

…と、揚げ足を取られる。…といつも、思いつきり屁理屈 わがまま だが…。

竜は黙つてそれに従つた。

仕方無い。

仕方無いのだ！

降りないと言つていた母が、車を降りて自分の息子に微笑んでいる。

そこまでは良い。

母の両手と右足が心持下がつていて、左足に重芯乗せているのが見えたのだ。

そう。

戦闘態勢である。

例にあげるなら、この体勢から有無を言わさず神速のワンツー、ロー・キックで体勢を崩して、逆足で踵落とし…。グロツキー状態になつた所をラツシューで急所狙いを決めてくるだらう。重いストレートや鋭い肘を食らつて五体満足では済まない。

「はあ…」

ズタボロの自分を想像してかぶり振り、再び車を押しにかかつた。

AM10:45

草原家新居内

新居は一軒屋だった。

一階建てで、庭がある。「『サラリーマンの夢』的な家を35歳の若さで建てたんや。車が安物になつて仕方が無いやろ?」と、父が言つているのを無視して部屋をグルッと見て回つた。一階に畳とフローリングの部屋が2つづつ。それぞれに荷物を置き、ぐたぐたと、するの年寄りだけだ。

「誰が年寄りよ!」

母が何か言つている。それを無視して愛用の黒ブーツを履いて外出に出ることにした。

新天地に着いたら、まず散歩と決めていたわけだ。

AM11:20 神葉町町内

「はあ、なんか、べつに変わり映えせえへんな？ 家もちよこち  
よこあるし、コンビニもすぐ近くにあつたし…。後は…新しい学び  
舎でも見にいこか 」

セツナヒト竜は頭の中に先程コンビニで見て来た地図を展開した。

（確かに商店街があつたよおな…）

5分後…

「あつた！公園！……………つて！違ひやん！ベタベタなお約束  
かいっ！」

（ビニをどう間違えて公園なんや…）

その答えは自分の深層心理にしか無い事を悟りボケモードを終了  
する。

そこには、商店街ビニルか自動販売機も無かつた。桜の木（梅か  
もしない）の花が咲き乱れ、決して狭くない公園がある。公園と  
言つても、ブランコやベンチぐらいしかない。いわゆる自然公園タ  
イプだ。

「…………。都會のなかで、数少ない自然を守ろつ…運動？坂倉  
市・神葉町自然保護委員会…………。賞金三十万円…………つて！？はあ！  
？ さんじゅうまん てなんや…？ し…しかも 何したら貰えん  
のか書いてないやん！ アホかこの町何考えてんねん…」

公園の前にあつた看板を見ながら竜は咳い…いや、叫んでしまつ

た。看板の汚れ具合から見て、一年以上前からそこにあるのは明らかだつた。しかし、その賞金に心惹かれるものがあるが、訳が分からないのでどうしようもない。

自然保護の看板（？）は丁度公園の正面にあるが、その後ろの公園はまだ昼前にもかかわらず鬱蒼と茂つた木々の葉に、陽光を遮断され闇を落としていた。

桜の木 桜ともはや決め付けたのある手前側は、そこまでと言わないが、奥は「冗談抜きで真つ暗だ。

「えつ？」

竜は目を疑つた。

別に昼間に真つ暗だつた公園に訝つたわけではない。

それは公園の中央にある、他と隔離された木……でもなく、その側に佇んでいる一つの人影だつた。

その人影は、公園の隔離された木を見上げているだけだつたのが……妙に気になつて、竜は公園に足を踏み入れた。

ドサツ

……と踏み入れた足の下にスイッチがあるが如く……そんなタイミングで人影は倒れた。

竜は驚き足を早めて人影に駆け寄ると、すぐに抱き起こした。

「大丈夫ですかえつと、おお嬢さん」

抱き上げてみて気づいたが女の子のようだ。長い髪が1・2割程度だけ三つ編みにして垂らしたような変な髪形だった。まだ若く、自分と同じかそれ以下に見える。とりあえず介抱しながら慣れない標準語で話す。女の子は目を閉じたままで、気を失っている。

ペルセウス

軽く頬を叩いてみる。

卷之二

実際、体が小刻みに震えていた。

（もしかして、危険な状態なんか！？）

おいつ！ おいつ！ 大丈夫かああつ！ じかりせーセー！」

力の限り揺さぶつて、叫ぶ！

「ああう~」

そうされて女の子は情けない声を上げる。少し涙目になくなつて  
いるようだ。何にしろ女の子は目を開けて、フラフラと立ち上が  
ると、口のへの字にして非難の声を向けてきた。

「あ…アメ…」

咄嗟に謝つてしまつたが、自分に非はないと竜は思う。

そんな事よりも、以外に元気な女の子に疑問を感じ、竜は首をかしげた。

「……つて、大丈夫なんか？ いきなり倒れたんやで？」  
「……なんともな  
いんか？」

「ふにゅう？」

女の子はフルフルと首を横に振る。そうすると長い髪も一緒に動いて首に絡まりそうだつたが。そして頭を搔きながら「えへへ」と顔を赤くしながら一言だけ言つた。

「あのね、お腹すいて動けなかつたの」

「行き倒れか、おいつ

とてもしょーもない理由についてシッコ!!を絶妙のタイミングで入  
れてしまう。何も無い空間にだ。

「奥へある事だよな~」

「「」はスラム街か」

そう思つと納得したので、もはやこの場に居る理由は無い。竜は意味不明に微笑んでいる女の子を視界に入れないようにして半歩下がつた。

「ほな頑張れや」

出来るだけ冷たく聞こえないようにゆっくりと言つながら竜は公園を出る為に、先程下げる片足をバネに駆け出す 前に女の子の姿が無い事に気が付いた。

「……えつ……」

急いで辺りを見渡すが何処にも人影は無い。竜が目を放したのは数秒程度なので走つて隠れる事も出来なかつた。第一足音を聞いていない。

（白痴夢？？ なんか変な感じしたから早めに退散しようと思つたのに…。悪霊ちやうやろな…）

公園が薄暗い事が災いし、怖い事を考へてしまつ。

竜は少し息苦しさを感じてきた。この世に存在しない者を見たのはもちろん初めてだつたが「見たのは」で、「感じた」事は何度かあつた。だから取り乱す事も無かつたし、冷静に行動したつもりだつた。しかし

（常識通じる相手や無い…）

ざわざわと広葉樹が風に葉を揺らしている。それを眺めながら、自分の心も揺れていのるのを代わりに表現してくれているようだと思った。

「まあ 一般論で言つたら…」

言つて握り拳を固めながら

「可愛い子へが幽靈なつたら勿体ないやんつー」

そして中指を立てる。無論、その相手は誰も居ない。さしづめ運命の神様にだらう。

「一般論違つてー。」

「……を？」

一人ボケツツコミをしたわけでは無い。

真正面に先程消えたハズの娘が立つていて。 ちなみに膝から下が無いわけでは無い。

しかし、不気味に笑つてはいる。

「ねえ～君つてさあ～面白いね～」

何が面白いのか笑いを堪えるよつこ~~手~~手で口許を押さえて笑う彼女。

「 も……幽霊に面白に言われたら敵わんわ……」

「 幽霊？」

彼女は言われてキヨロキヨロと回りを見渡してから急に背後を振り返った。そしてもう一度向き直った時には眉根をひそめて自分を指差した。

「 ……私の事？」

竜は無言で頷いた。

頭のテンプルにハンドボール大の汗を抱えたまま彼女の眉がバルサミコを間違えて使つたイチゴのタルトを食べた様にひん曲がつた。分かりにくいなら塩分20%の梅干しでも良い。

「 はあ？」

その声が漏れる前に予想出来たがやはり実際に聞くと恥ずかしい物である。

「 と…急に消えたやん」

「 消えた…？ んと、座つてたけど…。 あ！ それが消えたって事？  
あははあ～ うけん～ 」

「 は？」

解答『疲れててしゃがんだ気配も読めず、そこには居ない』という固定概念があつた』といつわけだ。

とても面白みのない話だ。

「あはははは～…………」笑つたらまたお腹がすいてきたの～りあ～  
……」

「忙しいやつちゃな……」

またも倒れそうになつたのを支えてやりながら、今更ながら彼女の服装が気がついた。白の清潔そうなシャツにチェックのスカート。どこかの制服なのかもしれない。……が上着が無い。

「なんや君上着どないしたん?」

いつの間にか関西弁に戻つている。

それを特に気にしないようなので安心した。関東人は関西弁に嫌な気になる事もあるからだ。

もちろん竜の偏見である

「おなかすいたあ」

「答えになつてへん」

まつたく話を聞いてないようだ。

「おなかすいたああ」

連呼する程らしい。

「君、何年生やねん」

「ふむ。一年生だよお」

小学?と聞き返したかつたがどう見ても外見は中学生以上に見える。背は低いが……発育は良い。

「?」

我知らず上から下まで穴が空くほど見ていたらしく彼女は少し身を堅くしながら睨んでくる。

「あ、いや。しゃあないなあ、なんか奢つたるわ」

『見物料として』といつ言葉を飲み込んだり。

「わあ、優しい、私の田に狂いは無かつたよお」

「確信犯の台詞やソレ……」

町中で、自分より若やうな女の子が行き倒れでいる事に、再び疑いたくなる。

「それじゃいい、あ、おべんとでよこよおー

「ひがりの話を聞いていなかつたのか聞いてない振りをしたのか分からぬが明るく腕を掴んで来た。

「私の名前は森川千穂<sup>モリカワチホ</sup>、貴方は?」

「え？」

「え？ じやないよーー血口紹介いーー まだ名前聞いてないもん」

「あ……ああ……」

名前を言つ程付き合いつもりが無かつたので完全にソレが頭に無かつた竜は自分に苦笑しながら大きく息を吸い込んだ。それを吐くと共に名乗る。

「俺は草原竜。ソウゲンと書いてクサハラ。血口」

何がよろしくなのかその時は分からなかつたが、その一言がこれから事件の始まりを予感していたのかもしれない。

守矢公園と書かれた石柱が入口にあるのを発見した。何せイキナリ人が倒れたのでしつかりと見ていなかつた。

「IJの公園はね。後ろに山への道があるんだよ」

千穂は簡単に説明してから公園を見つめている。

「ふ～ん」

適当に領いて竜も見るが、もつ少し離れて見ないと山があるかどうかも鬱蒼と茂った木に邪魔されて見えない。

「よ～わからへんな…。あ、そつこやアンタ何でこんなトコ居たんや?」

「むう～!「アンタ」なんて名前じゃな～よお～。やつを呑み込んだばかりでしょ～」

「ん…。あ～じや森川さん。なんでこん～」

「ふ～ん」

「……」

「ひやら初対面でファーストネームをお望みしご。

「ほな、千穂ちやん」

「はあーい」

呼ばれた途端に明るく手まで上げてくれる。

「……じゃ、話戻すと……なんでこんなトコ西さんや?」

「あ……えと……」

千穂はそれを聞くと笑顔を消してしまった。何かを考えるよつこ  
目を閉じるとゆっくり竜の袖を掴んだ。

「?」

強く握つて数秒。そして離れた。

「はやく行こ……」

次に発したのはいかにも質問の解答とは違つた言葉だった。何かか  
ら逃げる様に引っ張つてくる。

そこへ一人の少女が走つて来た。付近の学生だらうか?

学生服に身を包んだ、自分と同じぐらいの感じの少女が、今出で  
きた公園に走りこむのが見えた。

その横顔に見覚えは無いが、何か引っ掛かった。ショートヘア  
の元気そうな少女だつたが…

「泣いて…？」

その竜の言葉に反応して弾かれた様に、千穂は公園の方を見やる。

「また…来たんだ…」

「え？」

「ううん。行こう」

千穂の呟きに聞き返すが、静かに首を振り公園から離れていく。

「どないしたんや？ あの子知り合いか？」

「いいから！」

強くそう言う彼女の目にも涙が浮かんでいる。

「… わよか」

何か事情がありそうだが、本人が話したく無いようなのでこれ以上は聞かない事にした。

正直、これ以上泣かれても困る。

竜と千穂の2人はそのままその場を後にした。

「ただいま～」

靴を適当に脱いでキッチンへ行けりとし、ふと氣が付いて玄関に戻つてくる。

「ヤバイヤバイ…」

適当に縦や横に向いた靴を揃えて置く。こりしておかないと、後でこの靴が頭に直撃する事になる。

どういう事かといふと、揃えてない靴を見た母が投げつけてくるのだ。

竜の靴は軍隊で使われるような堅い鉄板入りの安全靴だ。それを履いて踵を頭に落とされると致命傷にもなりかねない。

かなり恐ろしい。

「ほひ、上がつてええよ」

ついででは無いが、玄関に立つたまま待つてゐる者に舌をかける。

「う…ん。お…おじやましま…す」

千穂はおどおどしながらわざと靴を脱ぎ、龍と回りついて揃えてから上がる。

「どないしたんや？ 別にそのへんから蛇とか虎とか出ていつくんで？」

「いや、わうじやなくて…あの…家の人は？」

入ってすぐの柱に隠れてキヨロキヨロと見渡している。

「家人？ ああ、両親か？ ん～」

パタパタと部屋を覗いてきて、すぐ戻る。その間に千穂は少しも移動していない。

「おりんみたいやな。 どけ行つたんやり？ あ、ちなみに兄弟おらんからな。 一人つ子やから…」

「いや…だから…わうじやなくつてね…」

「なんや違うんか？ ええと親父は怖い人ちゃうで？ おかんは…怖い人かもしねへんな…」

「あの～」

「あら？ これも違うんか？ 別に勝手に上がったかで何も言われへんで？」

「ああんもう！ だ・か・ら！」

「あつ、何!？」

喋りながら考え込んでいた所に、大声を上げられて少し驚いた。

「きょうよりい、あすよりい、ああいがつほおおしいー」

「なに?」

「う……ううん。なんでも無いよ。気にしたら負けだよ（愛よつ愛する君が欲しいー全てがー）」

光の中で揺れてる、お前の微笑み。足音だけを残して闇に消えるシルエット。満たされ羽ばたき、女神が背中向けて今。

と頭の中で一通り謎な歌つてみる千穂だった。

誰にも理解されないようなネタはやめた方が良いと天の声が聞こえたような気がした。

「あのさあ。誰も居ないんだよね。家に…」

「んん?…ああつー。親父達どつかいつたみたいやな」

変モードからイキナリ脱したので、ちょっとつっこいでいけなくなってしまった。

「あの…、年頃の男女2人が同じ屋根の下で2人つきりつてちゅうつといけないとおもうのー。でね、出来ればそのおじさん達が帰つてくるの待つて…つてちゅうつ

ヒー、近づいてくるなんて反則だよー…… わやー。」

ポクツ

「わやみやー?」

「俺はそんな変態やない！ とゆづか飛躍しそー。」

手加減してチョップをかます。それを受けた「あつひの世界」へ行っていた千穂が現世に戻ってきたようだ。

叩かれた頭を押されて「あれえ?」ヒマークを浮かべている。

「はあ…… やつぱ変やわいの娘……」

竜が溜め息をつきながら眉間に押されて力無く咳いているの、千穂は「どうしたの?」と聞いてくる。確かに自分も常識人とは言えないかもしれないが、ここまで根本的に変ではない。

はずだ 初めは「女の子に出来てラッキー」程度しか思つていなかつたが、今思つと後悔し出してきた。

「何か頭痛そうだね？ 風邪？だめだよお氣をつけなーとー」

その頭痛の原因が何か言つている。

あなたの事で痛いんじゃー……とは流石に言えなくてバレない程度の作り笑いを優しく声を出す。

「いや、何も無いよ。ほら、ひつひで」

後で考えるとこの声は震えていたかもしれない。何にしろ、気付いて無いようで、口一口としながら後をついてきた。

「はあ……」

本日、一度田の溜め息をついて、竜は今所に足を運んだ。

家族の顔が見れるキッチン。広いテーブル。

綺麗に並べられた調理器具は雪平鍋や中華鍋、圧力鍋にフライパン……

一見して一式揃っているのが分かるが、一般家庭のそれよりは少し多いような気がする。

フライパンだけでも五つある。

炒め物用、卵焼き用、和え物用……と後は竜には分からなかつた。何にせよ、良く洗つてもフライパン一つでも臭いが移るらしいので母は絶対それを雑には使わせてくれなかつた。だから竜自身のフライパンがあつたりする。

「えーと、人参にピーマン、玉葱に、豚肉は…切り落とし? まあベーコンにするか…ホールトマトは何処にあるんや?…ケツチャブだけでええかこの際…うーむ…」

ざつと見て適当に材料があるので後は竜の腕次第となつた。その辺のコンビニで買つてくれれば済むのだが折角だから火の通つた物にしたかつたのだ。

「あら?『ママ油切れとんの? ええわつ、なんとかなるし!…後は

…

「あの～」

「ああ、お済むか～…」

それだけ言つて後ろからの声を無視してまた冷蔵庫を漁る。

「あの～…」

「なんせ～」

再度、後ろから声が掛かつて煽さう振り向く。

「今から作るの～」

「いやで～」

やつ千穂に面つと、また採集作業に戻つたとすると、千穂は竜の肩を掴んでぐいぐい揺りはじめてきた。

「うふ…うふうふ～」

「なに～？ いらへんの～？」

再び作業を止めた千穂は振り返して、千穂はそれよつぬめじやつて見つめ返してへる。

「そんなの待つてられないよ～一限界来てるんだよ～～～一何かすぐ食べれる物無いの？」

「すぐに食えるもん？ ん~、チキンピラフがあるけど……？ 何時のやうり？ 今日行つてゐる間やと里つたび……」

「そ……それでいいよー。十一分だよー。」

「そおか。 これと、これと……」

チキンピラフが入つたカレー皿を持って、そのまま調理場に向かう。千穂が言つてゐる事は完全に無視している。

「あつ！ そのままいいよー？ 今日作つたんだよね？」

「そんなんわけあるかい。 そのままやつたら冷えて腹壊すで？ 一応さつと火ぐらい通さなな。 え~と……」

電子レンジとこつ選択肢は頭に浮かばない。自分用のフライパンに火を掛け、調理油では無くバターを一欠入れて延ばす。油はあらかじめ少し塗つてあるので少量でも大丈夫そうだったが、甘味を少し出す為だ。

「よつ……とー。」

そこにさつき持つてきただチキンピラフを入れて、適当にひつくり返したりして炒める。

そこまで見て千穂は驚いていた。慣れているので、いじぼしたりはしなかつたのだが、そこで驚かれるのは竜にとって心外だった。

炒め終わったピラフをカレー皿に戻し、今度はそこに溶いた卵を流し込む。ただ、その時間はほんの数秒だ。

表面がほぼ半熟の状態でピラフの上にのせて、それを指で左右に広げる。そこから半熟の卵が流れ出した。

「オムライス出来上がり～ ほいお食べ～・・・ puff

そう言いながら、コンと千穂の前に出してやる。まるで子犬に餌をやつしている気分になってしまつて竜は吹き出してしまつた。

「うわああ…美味しそう～」

テーブルの椅子に座り何処から持つてきたのかスプーンを構えて既に戦闘態勢だつた。征服するのは田の前のオムライス。

「そんなん…、出来てんのを卵被せただけやん！　だ…誰でも出来るわ～！」

「そんな事ないよお。ほら、これってバターで炒めたんだよね？卵もこんな感じに半熟なのつてくりーみいだよお　ああっ！？チーズ入つてる？」

「言われて恥かしくなつてしまつ竜。

「そのまま出すんもアレやし…」

もぞもぞと肯定してしまうが、それを聞いているのか千穂は一心不乱に田の前の敵を攻撃し続けた。既に敵は数秒で半分を食い尽くされている。

「ほ…ほんまやつたらもつと美味しいもん作つたつたのになあ」

「いい奥さんになるよお～お嫁に来てえ～」

喋りながらもその食欲が収まらない千穂を見ながら余計に恥かしくなつてしまつた。が、とりあえず義務を果たしたので話を切り替えることにした。

「なあ、食べながらでええけど聞いてええか？ なんで、あんな所に倒れてたんか……」

「お～しぃ～ くわお～ホントにちやんと待つてれば良かつたかなあ～ どんなのが出てきたのかなあ～」

「聞いてる～」

皿の前に乗り出して見上げ、竜は苦笑する。やつされて千穂は冷や汗のよつなものを浮かべ、スプーンを動かす手を止めた。そして観念したような素振りを見せて一言だけ言つた。

「孤児になつたの」

その一言で、辺りの時間が止まる。

「ただいま！」

その声で2人共びくつと身震いして時間を再度動くのを認めた。声からして母だと竜には分かつた。トントンと軽い足取りで近づいてきて、台所に顔を出した。

「あ～！竜帰つてたんなら「おかえり」の一言も……あらお密さん

? いらっしゃーってあなたー!?

「え…どう…」

母と千穂が煮たような表情で驚愕しながら指を差し合っている。

「なんや知り合いなんか? おかん? ……おかん!」

放心したように自分の息子の声が届いて居なかつた。それでも千穂を見る目を離さず、そして千穂も同じように見つめ返している。

「ええー! 何を……ちょっとあなた来てー!」

そう言つと千穂を引っ張つて台所から出て行く。

「え…みよ…」

「あなたはそこで正座つーー!」

「ハイツーー!」

一喝されて、素直に床に正座してしまつ。それを見て満足したように笑い、母はそのまま出て行つた。

条件反射とは言え忠実に座つてゐる自分を、他人事の様に見つめ

る自分がいる。

生理的にも物理的にも母親には逆らえないのだが、ここまで来る  
と息子とこうよりペチトに近いのでは無いかと思えて来てしまつ。

そんな卑屈にに呆れてしまつが、そろそろ立ち上がりうかとした  
時、千穂と母が戻ってきた。

「よひしご。ちゃんと」「待て」「出来たわね」

「俺や犬かい！」

前言撤回。「ペチトに近い」では無く「ペチト」「らしご。

「ふふふ、やつぱりおもしろい」

千穂が気楽な感じで笑っている。そういうえば、先程までの暗い表  
情は、欠片も見当たらなかつた。母と何か話をしたのだろうか？

「あのね、私、この家の人になつたから

「はーー!?」

「養子として向かえるのよ」

一人が「冗談を言つているよ」には見えない。

「冗談を言つてる時のよつたな楽しそうな感じでは無く、「嬉しそう  
な顔をしていたからだ。母は少しだけ苦笑しているよ」にも見えた  
が。

「私、十五だから「妹」だよー。よろしくね、お兄ちゃん」

竜は絶叫した。

時間軸不明

セピアの世界だった。  
自分は存在していない世界。

誰かが泣いている。  
何が悲しいの？

次に一人の男が見えた。  
少し乱れた服装の若い男だ。  
「足元」に少女が「転がっていた」。  
少女の服はボロボロになつて所々破れていた。  
男は背を向けて歩き出す。

「どうして…」

少女がポツリと呟いた。

「…で汚すの…」

鳴咽と共に零した言葉に男が振り返った。

「うねりこ

それだけ言つと男は少女を蹴り上げた。

「……。」

悲鳴も無く崩れ落ちる少女に男は蹴り続ける。

「お前が誘つたんだー。お前がー。」

「やめてー。やめてやめてやめてやめてやめてやめて…」

「お前がお前がお前がお前があー。」

「いやー。」

「好きだー。」

「……。」

男は我に返つて少女を抱きかかえる。しかし、あごに手の身体を捨てる。

「うわあああああーー。」

男は逃げた。少女を捨てて。

少女は……死んだ。

4月4日(月) AM7:01

草原家・竜の部屋

「あほか…」

まだ虚ろな目を擦りながら田舎ましを止めて、置きぬけにわづか  
いた。

「殴り殺しどって何が「好き」やねん。」  
「いつ死んだほうがええで」

今見た「夢」を思い出して気分が悪くなつた。朝の清々しい空気を吸う為に窓を開ける。

外は寒そうな風が吹いていてすぐに、閉めたがその新鮮な空気を腹一杯に吸い込み、なんとか気分は收まりそうだった。

龍はじつこいつ悪夢をたまに見るが、その内容を忘れずに覚えてい  
る。

妙にリアルで一時期「予知夢」かと思ったが、竜自身にこういつ  
体験は無いし、しようと思わなかつた。

どう考へても気持ち悪い狂つた男だつたので他人だとは思つが、

実際にあるとすれば殺人事件なのだが竜の周りでそんな事件があったとは聞いていない。

だから考えても仕方が無い。

すぐに忘れる事にして着替える事にした。

今日から学校である。

AM 7:50

私立新海南高等学校

私立新海南高等学校。今日から通う事になった。この学校は丁度今年で創立100年目を迎え、伝統のあるこの学校だが、最近、校舎と体育館を改装工事をしたばかりなのでその古さは感じない。

「なかなか綺麗なところやなあ～」

校門を潜りすぐのロータリーをテクテクと歩きながら、そのロータリーの横にその改装したと言つ体育館を眺めた。

ふいと風が吹いてきて、校門側に植えてある桜の木から花びらが一片、そつと頬を撫でる。その風に目を細めて竜は少し感慨に耽り始める。

新しい学校……俺の新しい場所。もう、俺はここ以外の場所では存在できない……。前の学校に残してきた親友達……。

「アイツ元気にしてるかな……」

退学の理由になつた友人を思い出す。最後に別れる時、しきりに謝つてきたが、自分が思つた通りに行動しただけだったので後悔も無かつた。

だから、いや、それでもこの遠く離れた地で遠い昔の昔に懐かしく思い出していた。

もうあの頃には戻れない。しかし、後に戻るつもりは無い。もう振り返らないと誓つたのだ。……そう……振り返らないこと……。

振り返らない事……それはよく言えれば勇気を降り絞る事。悪く言えば……逃げてくるだけだ。

「やう一……振り返らないと誓つたんや！ 俺はっ！」

「あの～……」

後から声がかかる。

だが、竜は振り返らずに虚空を見上げるだけだった。

「ね～え……」

再び声が聞こえた。先ほどと同じ声だ。しかし、振り返る事はない。

「振り返る事が、今までの失敗やったんや！ 僕は振り返らへんぞおおつー！」

「おにいちゃあああんつー！」

「やかましいいっー！」

再三声がかかり、あまりに煩いのでつい振り返ってしまった。人の決意など脆いという事を証明してしまったようでは立つてしまつ。そこには千穂がいた。相手をしてくれなかつたので少しふくれ顔で。

千穂も自分と同じ様に制服を着ているが、学ランの竜に対して、千穂は黄色いセーラーだった。出会つた時の服はこの学校の制服では無かつたようだ。

「もうーなんでムシするのよー？ しかも、なんかブツブツ言つてるし…。私、何かした！？」

「あああああつーーー！」

竜は頭を抱えて大きく仰け反つた。

「やかましいわいっ！ 人が真剣に悩んで「振り返らない」つて決めたのにあんたはあー！」

「それって無視するつて事でしょ？ なんで？ どうしてそんな事するのー？ 陰険な意地悪？ そんな事するつていうなら私だつて考えが

あるよお兄ちゃん…

「それやつー

「な…なに?」

最後の部分で聞き捨てなら無い事を聞いて、竜は叫んだ。他人にイチイチ「お兄ちゃん」等言われたらたまつたものではない。

「その「お兄ちゃん」ってのやめえ! あんたとは完全無比に他人やつ!」

「じゃ、これどうだお。 はい」

「ん?」

千穂は背中に背負っていたアライグマの姿をしたリュックから、緑色の紙切れを一枚差し出してきた。それを受け取りながら訝つて見ると、紙には「住民票」と書いてあった。しかも、名前の所が「草原 千穂」となっていた。

「なんやこれ? 偽造証?」

「ちやーんと都知事の印あるよー!」

昨日の日付で受理されているその紙を、破りたくなりながら千穂に返してかぶり振る。要するに書類上でも家族になつている

…「兄妹」に…。

「昨日今日すぐ出来るんかいな…。全くゲームの世界やなこれ…

見知らぬ美少女がイキナリ家に住む事になり、そのままその義兄妹と良い仲になつたりするゲームを思い浮かべてしまつ。…が、これは現実なのでそんな甘い事にはならないだろうと竜は思った。

千穂も同じ学校に通う事になつたのだが、学年は一つ下の一年生。正直中学生かと思つたがどうやら童顔なだけのようだ。

「入学手続きに必要ななんだつて。お兄ちゃんも編入手続きしなきや、でそ？ 職員室」  
「…………！」

何気なしに校舎を指して、ポケットからその「編入手続き」を出してきた。

「な……なんでお前が持つとんねん？ 確か手提げに……あら？」

持つっていたブルーの手提げ鞄には筆記用具だけ入つていた。教科書等は今日支給されるので、後は今日必要な書類だけが入つていて。…ハズだつたのだが…。

「にこにこにこお～」

千穂が微笑んでいる。

その顔を見た瞬間、頭の中で一筋の光が駆けた気がした。どうやら竜は古い人間では無いようだ。

「私とて、ニユータ〇フのハズだ！」

「は？」

「いや……抜き取つよつたなーー？」

聞き返す千穂を無視して拳を挙げて激昂するヒー、「きやあー」と言しながら千穂は逃げてこぐ。

それを見ながら竜は嘆息してゆっくりと歩き出す。

まあ、どうでも良い。面倒臭い。

新しいスタートが、一人では無いといつ事だけで、心強いのだから……。

AM 8:25

私立新海南高等学校・職員室前中庭

きへんこへんかーんこへんかへんこへんきへんかへんびへん

ドタツ

「ビ……ビウしたの？お兄ちやん？？」

「い……いや、妙に外れたチャイムだなと……」

学校が変わればチャイムも変わるのだな。と思つてはいたが、思いつきり吉〇風に「ヶてしまつた。

「どうか、予鈴ですか？ 早く職員室を見つけなくてはいけません」

「お兄ちゃんがこっちだつて言つから来たのに、中庭じゃない…つしきからなんでそんな喋り方なの？」

千穂が聞いてくるので、自身満々に答えてあげた。

「何を言つているんだい。立派な標準語じゃあ～りませんか！」

「どうりかつて言えれば、怪しい訪問販売かチャー〇一浜だよ……」

妙に言葉の語尾のアクセントが高いので気持ち悪い。竜もそれは気が付いていたのすぐに頷いた。

「まあ広い学校やからな…。つこでに見学したと思えばいいんや。ほり、そこやな」

中庭から校舎の窓の中に「職員室」と書かれたプレートを下げた部屋を見つけた。入り口を探そうと千穂が見渡しているのを尻目に…。

「あー、お兄ちゃん！？」

窓を開けてそのまま中に飛び込んだ。幸い廊下には人は居なかつた。

「「」ちのが早い？　はよ来いや」

「私スカートだよー？　できなによー。」

そう言つて走つていぐのを眺めながら自分だけ先に職員室のドアを叩いた。

「失礼します」

扉の「職員室に入る前はノックしましょう」という張り紙に基づき、ノックしてから中に入る。

中に入ると、すぐの席にプラチックのプレートで「教頭」と書かれた物が置いてある。そこから前に並ぶ様に各教師の机があつた。流石に校舎が広いだけあって、職員室も広かつた。

とりあえず竜は、すぐ近くに座つていた女の教師に話し掛けた。自分の担任を探すためだ。

「あの、すいません。お…俺、新田つていうセンセのこと行きたいんやけど…」

「社会科の新田先生？　新田先生なら…ほら、あそこそこいらっしゃる眼鏡の先生がそうよ」

女教師は、すぐ斜め前を指して教えてくれる。

そこには、言われた通り眼鏡をかけたショートカットの地味な… さえない若い男が席に座つていた。女教師に指されて、ヘラヘラと愛想笑いをしている。

「ああ…。草原君だね？　話は聞いているよ。私が新田ニッタ昇ノボルだ。しかし君もこんな中途半端な時期に編入とは大変だね」

「ええ。困りますわ。何分右も左も分からん状態ですんでよろしくう頼んます」

そう言つて握手を求めよつとしたが、新田はその手を氣付かない振りをして流してきた。

（なんや？　いけすかんセンセやな。握手も出来へんのかい）

「き…君は確か前の翔星学園ショウセイガクエンをぼ…暴力事件で退学になつたそうじやないか。こっちではそんな事は無いよつに頼むよ…」

なるほど。この先生は自分に怯えているよつだ。どうやら見た目通り臆病な性格らしい。

（あのハゲ校長チクリおつたな…）

当たり前である。

「考え方

竜は撫然と答えた。おかげで新田先生は弱つた様に頭をポリポリと搔いている。

「ま…まこつたなあ～。そ…それじゃ君の妹さんは一年からですかね？」

急に言葉遣いが変わってしまう。面白い先生だ。

「はい。一年の… A組と聞いているんですが…」

「おわっ…? いつの間に居たんや?」

急に後ろから声がして驚いたが、いつの間にかそこに千穂が居た。

「今来たトコだよお～ヒ～トイよお兄ちゃん! 先に行くなんてえ!」

「ええと…職員室では静かに…」

新田先生がぼそぼそと聞こえるか聞こえないかぐら～小さい声で諫めて来る。

「ああ! すいませんええと」「井田先生」

「いや…私は新田だよ…。ええと、草原千穂君だね? 君は確か担任の先生はそちらの下々原 シジハラ ミナ 美奈先生だよ。物理を担当して下さっています」

千穂の担任は先ほどの女教師のようだ。ロングヘアが似合つ落ち着いた綺麗な先生だ。

「さて、そちらは任せして…。草原君。教室へ行こつか」

「あつ? ああ…。ほな、千穂ちや…千穂、またな!」

「う～ん」

何故か咄嗟に呼び捨てにしてしまった。他の者に一人の関係を説

明するのが面倒だったからだ。千穂は呼び捨てにされて嬉しそうだが……。

AM 8:32

私立新海南高等学校・本館校舎三階廊下

少しつらがりした顔で歩く新田先生。その後ろでよそ見しながらダラダラと着いて行く童。あれから、三階へ上り、一年の教室へ向かう。

この学校は本館が4階建てで、4階が一年、三階が一年。二階が三年と下がっていき、一階は職員室や、事務室がある。他の校舎には技術棟となつていて、機械室や実験室等の棟がある。

「しつかし、気の弱いセンセやな…。あらあまだ結婚していないで。よく学校一番の美人のセンセに片思いとか……。なんや変態趣味の一つや二つ…。まさか！ 隠し撮りビデオとかが引き出しへ！？」

「そんな事はしていませんっ！ 失礼な」

「あ……」

この間にか立ち止まって、こちらを見据えている。ビリヤリ思慮を声に出してしまっていたらしく。

「ええと……それぐらいボキャブラリーあつた方が面白いかなあつ

と…」

「そんなボキャブラーー産業廃棄物並に使えません… 調合したつて賢者の灰にもなりやしない！」

怖い事を言つ。最後の方は意味が分からなかつた。

「はあ…。相はこつもやつなのかい？」

心底深い溜め息をつく新田先生。

「えへへへへと…………あつーーーーが俺のクラスやなー? 2年C組  
ほな、新田センセお先にびじうわー!」

「はあ…………」

何か竜には、今の自分の一言でかなり勝手に「納得」された気がした。

AM 8:35

私立新海南高等学校・本館二階一年C組教室内

出席と取つて。

「ええと、今日はこのクラスに新しい仲間を紹介します。皆さん仲

良くしてぐだわー

新田のその言葉に生徒達は色めき立つ。

「センセー 転校生ですか！？」

「変な時期に転校生だな？ 変な時期じゃない転校生ってのも知らないけど」

『カツコイイ（カワイイ）かな～？』

「萌えか燃えかどつちだ！？」

「ちくしょーめえ～～ イベント発動～～～！…」

「ほらほら。静かにしなさい。教室に入りづらくなるだろ？ こうこいつのは最初が肝心なんだよ？ ほら、皆がつるさいから入つて来ないじゃないか～ お～い草原君、入りたまえ～」

.....

「あれ？ どうしたのかな？」

教室の扉の前でまつて いるハズの竜は中々出てこなかつた。

「もう出でていいんだよ～？」

それを聞いてかどうか、教室の扉が勢い良くガラツーと開いた。それと共に竜は妙に腰を低くして手をパチパチ叩きながら入つて來た。

「ども～！ はいっ！ よろしくおねがいしますね～ 草原 竜つて いいますわ～。今日は学校へ來たんですけど学校つて言えばアレですね、私としては制服を思い出しますね～！ 世界は俺の物だ～！」

そりや征服やろ！・・・はいはい。そこの人唖然としない。  
なんて芸人ノリした関西人違うからよろしゅう

『…………』

竜以外のその場に居た全員が何があつたのか解からず、唖然としている。

「おおー！関西弁じやん！」

一人の男子生徒がそう叫んだ瞬間から、時間がまた動き出したようになくなつた。

「なんや。外したかと思つたわ…」

竜にしても第一印象は大事だと思っていたので、この台詞は前晩に考えていたのだ。少し緊張して中々入れなかつたが、それも間を取つたと考えれば成功だと納得した。

となりで小さな声で「そんなボキャブラーもいらないよ・・・と亥いている眼鏡が居るが知つた事では無い。

「この学校関西人以内から驚いたよ」

「アレ？確かに先生に居ただろ？ほら、保科とか、矢尾とか…」

「でも、生徒には居なかつたわよね？聞いた事無いじやない」

という証言を元にこの学校には関西人は竜一人のようだ。

「俺、標準語嫌いなんやけどな…」

関西人は関東人とは性に合わない気がする。関西人に言わせれば、

関東人のアクセントが生意気に聞こえるし、関東人に言わせれば関西人の喋る方はキツそうなのだ。

竜の場合、母がこちらの人間なので慣れてはいるはずなのだが、生活はずっと関西だったので今一つ割り切れないでいる。

しかし、全く関西人が居ないなら居ないで、人間は環境に適応していくものだと感じた。嫌になつてキレるぐらいでもなさそうだ。

A  
M  
1  
0  
:  
4  
1

私立新海南高等学校・本館三階二年C組教室内

それから休み時間になつて、雪崩れのように質問攻めが続くので、初めは愛想笑いをしながらなんとか凌ぐが、時間が経つにつれて段々と疲れてきて鬱陶しくなつてしまつ。しかし、三時間目の休み時間には人がやつと少なくなつた。

「ねえねえ、竜君。ウチのクラブ入らない?」

それを見計らつて小柄な女生徒が近づいて来た。

竜君！？ 馴れ馴れしいなあ。……………でもかわいいやん。

クリクリとした目と、ショートカット… ちょっと外に跳ねている癖があるが、それもまた似合っていた。しかし、この感じにはちよつと記憶にある。どこかで感じたような…。

「あつー！」

何処かで見たような！？

「私、火鳥茜カトリ アカネって言つてお。よろしくね。そういえば竜君つてどつかで会わなかつた？ 何か初対面つて気がしないんだよね？」

「お…俺もそんな気が…まてよ…公園…公園でだー！」

「えつー？ 公園つて守矢公園？…や…昨日…？」

昨日、守矢公園で出でる時に走りこんできた女の子に似ていた。ところが…本人のようだ。

「ああ、アンタが泣きながら走りこんでいつたのを覚えどるわ」

やはり、昨日の女の子のようだ。またか、同じ学校の同じクラスとは思わなかつた。

「うえええ…。恥かしこよ…」

「あんとき何かあつたんか？」

流石に気になつて聞いてみるが

「ええと、いんな所で再会したのは運命の出合でいだよね… それで…」

全く聞いていない。ところが無視された。

「それで、この出会いを記念して一緒にクラブやらない？」

あらかじめ用意していた台詞なのだろう。完全に棒読みだった。

「あのねあのね。それでねこの学校の……」

「ちよ……ちよっと待てやー。この話の話をして……」

「東に不思議な事があれば東に！ 西に怪事件があれば西に！ 我々は！」

「じゃー… かましいー…」

「ひやあああつー？」

新調してもらった教科書を丸めて思いっきり後頭部を叩いてやつた。それでやつと止ましたが、殴られた辺りをさすつて「？」を浮かべているようだ。思いつきりトランス状態だったようである。

「まあまあ落ち着いて話しそうや。なんや？ クラブの勧誘かいな？ まあ部員勧誘つてのは大事やと思うけど、人の気持ちも考えてもらわんと…。なあ火鳥さん」

「う……ん」

やつと話の主導権を握り、余裕を持つて話しだした。神妙に話を聞いてくれるようで悪い人では無いようだ。

「…うん。」「めん…。迷惑だつたよね…。強引過ぎたよ」

「そ…そやな。まあお互いの事もあんま知らんし、もひひょつと仲良ようなつてからまた頼むで」

それを聞くと茜は下を向いてサラサラのショートカットの下に暗い表情を覗かせてしまった。流石にそこまで落ち込まれるとは思つていなかつたので竜は「ぎょつ」として慰めの言葉を掛けようとするが、人間焦つてしまつと上手く右脳が働かない。

しかし、そう考えていると、今まで聞こえていなかつた辺りのヒソヒソ話が妙に聞こえやすくなつていてるのに気付いた。といふか、聞こえる程声が大きくなつていただけだが。

「ほら～、また火鳥の奴クラブ勧誘してるわよ。ほんつと迷惑なのよね！ あの娘」

「一年の時も田代君入っちゃつたもんねえ。図々しくて～」「ウチも部員少ないのにな…」

のんびりした女と、内気そうな女と、キツイ女の三人。の内声がデカイのは最初のキツイ女だけだったが、何故か三人とも良く声が通つてきた。

ええ様に思われてへんねんなあ。この娘…。

そう思つと可哀想になつてきた。一度でも知り合つた人間をけなされるのは氣分が良い事ではないし、本音を言えばこんな可愛い娘が回りから虐げられるのを見るのは嫌だ。

もつと極端に言えば顔が氣に入つたし、お前等は圈外！

…ぶつちやけた話、なりふり構わない言動で一言言つとすれば「黙れブス」だ。

まあ、そんな事はいいとして…。

茜の方を見ると、どうやら彼女のも聞こえたらしく、顔が青ざめている。それを見ていると、目線が茜と交わり、茜は表情を明るくして言つてきた。

「…あっ…」メンねえ。それじゃね

そのまま、力無く肩を落として席に戻るうとするから、余計に同情してしまつて次の瞬間、竜は引き止めていた。

「まつた！」

「え？」

「クラブつてどないして入るんや？」

「えつ……」

茜は一瞬分からない顔をしたが、すぐに手を合わせて歓声を上げる。

「えつ？ええつ…？ いいの？」

気の良さそうに笑いながら……反面、苦笑しながら竜はその笑顔を見返してあげた。

「ああひ。えいせ家帰つてもヒマやからな～」

「うわ～ありがとう ウチ部員少なくて困つてたんだあ」

凄く嬉しそうにほしゃを回る西。それを見てこるとひままで嬉しくなつて、いらなこ事まで言つてしまつ竜。

「それで? どんなクラブなんや?」

「あれ? 言つてなかつたつけ? …良く入る氣になつたね?」

「へへ…」

「ひ返つてくるのは田に見えているの。…。流石に同情と下心で入らうとしたとは言えず、フォローを入れようとするがますますドツボにはまる。」

「それは、アレやー！ 学校のパンフレット見たんやー。」

「……でも。私まだクラブの名前ひてなかつたよね? …あれ? 言つたつけ? あれえ~?」

竜の苦し紛れの言い訳は、ほほーの一言でかき消されてしまった。

「まつ…せっかく入つてくれるんだから別にいいわ。 それで、ウチつて副部長いないのね。竜君よろしく」

「はあ? 聞いてへんでー?」

「当たり前だよ。今言つたんだもん。ホントは部長と私合わせて4

人居るんだけど、皆違う役に就いてるんだあ。副つて名前だけだからいいよね？ というか決まりで決まつたあ！ それじゃね〜

「あ！ おいつ！？」

またも強引に話を進められて、勝手に戻つていった。竜の呼び止める声は完全に無視された形である。

「…なぜかは…」

きーん／ーん

竜の咳きと同時に例の氣の抜けたチャイムが鳴る。この音と共に忙しい日々の幕開けのような気がしてならない竜であつた。

P  
M  
0  
:  
0  
6

私立新海南高等学校・本館二階二年C組教室内

「午前の授業も終わり、お昼の時間。草原 龍のよつた生徒の場合、学校に来る理由の一つかこれがこれの為だと言え?」

「勝手に決めんなや! ……ていうかイキナリ出て来て何やねんあんた!」

チャイムが鳴つてから数分後、竜が伸びをしながらアクビをしていると、急に横から声と共に小柄な学ラン姿の怪しい者が立つてい

た。

その者は言われてフフッと不敵に笑い、そのまま親指で自分を指して名乗り出した。

「誰だ…と言われば答えるしかあらんかな…。 我はこの学び舎の支配者……その名もラインハルト…」

「なにい!? つて! ライン…つてどう見ても日本人やろあんた…」

竜の冷静な声は聞こえてないのか、ラインハルトと名乗った者は台詞は喋るのに熱を上げている。

「転校生といつのは貴様かあ! 」この学園は我が支配の内に成り立つていい! 貴様の……あいたあつ!」

ラインハルトは後ろから現れた茜に殴られていた。

「なにやつてんのよ! ち~ちゃん! またそんな格好してえ!  
転校生いじめちや駄目でしょ! ? まつたく」

「うう…。茜え良い拳持つてるわ。危うく三途の川見る所よ。心な  
しか真つ赤に燃えてない? でもねえ。最近ネタ無くつてさあ~。  
「転校生初バトル! おまえは炎の○校生か! ?」的なノリで良い記  
事になると思つたのよお」

「今時そんな二面記事いらないよ…」

ラインハルトは急に女言葉に変わると茜と気軽に話している。竜

は気になつて辺りを見渡してみるが、それをポカーンと見つめながら佇んでいるのは自分だけのようだ。皆慣れている様に、特に気にした様子は無い。数人「ほり、まだぜ」と面白そつと言つてゐるだけである。

「なんやねんアンタ…」

良く見ると確かに女のようだ、学生服が微かに膨らんでいる場所を眺めて最後に改めて顔を見る。何處にでもあるような顔だが、元気な笑顔と意思の強そうな眉が印象的なショートボニーの女性だつた。ちなみに天辺に触覚のような毛が一本伸びてゐる。目は擬態ではないだらうが、電波を受信したり出来るかもしねれない。まあ電波だ。

「私はらいんは…」

「もひええて…」

またも偽名を名乗るつとする彼女を寸秒で止めると、横の茜に視線を転じた。茜は呆れた顔をしながらラインハルト君を睨んでゐる。

「Jの迷惑暴走娘は、保科 千奈つてこの学校の新聞部の部長さんよ

「あいやーー よそしゅーたのんますーてへへ」

紹介されて少し恥かしそうに関西弁で話す保科千奈さん。

「ん? アンタ関西人かいな?」

妙に熟達した関西弁に竜は訝った。微妙なアクセントがしつかりと発音されていて、変に懐かしさを覚えるぐらいだ。

「『』の学校には関西人おらへんやつてなかつたか？」

その言葉に保科はキラリと瞳を輝かせて雄弁に語り出した。

「ウチのおとうはん、関西人やね。ヒラカタつて所が実家や。だから昔からよう聞いとつたし、よう実家帰つとつたから嫌でも覚える。ああそりやう。ウチの学校におかあはんがあるんよ」

保科は腰に手を当ててフフンと鼻を鳴らした。

「さて 無難な所で、趣味とか自己紹介してもうらえるかなあ？」

転校初日で学校一有名な生徒にしてあげるわよ」

保科は何処から取り出したのかボイスレコーダーを取り出して、ずいっとにかく寄つて来た。

「なんでやー こちこちそんな事せんでも普通に暮らしどのだけええやろー。」

鼻先に当たるマイクを押し返しながら、竜は叫んだが、保科は怯む様子は無い。長年の取材で強引だと忍耐力には自信がありそうだつた。

「まあまあ。アナタが裸電球舐めまわしたり、緑色の妖精が見えるとかそんな変態でも驚いたりしないからさ。根掘り葉掘りずっとお願ひお願ひ

「あ…あほかっ！そんな例あげるアンタのが変態やろー…？」

「あーーひどいんだあ！ 女の子にそんな事いうなんてえー」

「せつしき思いつきり男装しどつたやんけつ！宝塚かアンターーー！」

「竜君ー。ちーちゃんの質問は答えた方が楽だよ？ じょなきゃ家まで着いて来ちゃうよ？」

西から恐ろしい助言が聞こえた。自分より確実にこの新聞部とは付き合いが長そうな者の助言なので素直に聞いた方がよさそうだ。

「せつしき。名前からお願いね。撮つてるからー。恋人とか居る？ スポーツは何が好き？」

「俺は草原 竜。16歳。恋人はおらん。スポーツはやってへんけど身体は昔から鍛えとるな」

「ふむふむ。草原 竜君16歳現在恋人募集中、女性に襲い掛かる体力は並では無い…と」

「またんかいつーーー！」

「何よ？」

「何よ？ とか聞くか！？ 誰が襲い掛かるねん！」

「あー、比喩よ。襲い掛かるキケンがあるとは誰も言つてないでしょ？ ええと…次は…」

「勘弁してえや…」

その後次々と質問をされて、その度ツツ ノミを入れ続けたので、竜はこの休み時間には全く休めなかつた。どうも茜といい、この保科といい人の話をちゃんと聞かないヤツラばかりのような気がして、竜の関東人の印象マイナス1。

PM 3:15

私立新海南高等学校・本館二階二年C組教室内

「まつつかつ」おー

元気良く跳ねて、竜の前まで来た茜は目の前で踊つてゐる。竜の精神ポイントが下がつた氣がしてしまつ。どうでもいいが声がピンク色だ。

「元気やなあ茜ちゃん…」

今日一日で質問責めばかりだったので、精神的に参つてしまつている竜は、放課後だというのにまだ机から離れられないでいた。

「竜くん歳寄りだよ。ほらほら~楽しい楽しいクラブ活動にいざ行かんイスカンダル~」

「遠すぞゐるやうなれ……」

「やうやう。せめてガンダーラにしどきましょつよアカネ～」

「それでも国外やろ……つておわつー！？またアンタかい！」

とても自然に話しに加わってきたツインテール元気娘保科が、力バンとボイスレコーダー片手に机に座っていた。今度はちゃんとセーラー姿であつたので改めて女性だと感じれる。

「神出鬼没が新聞部員の鉄則よ。追いかける側が足取り見破られるのは愚の骨頂だもの」

「や…… やよか」

全てを信じるわけではないが、人間離れした隠密行動が本当なら「支配者」という言葉もあながち嘘だと言いがたいかも知れない。この新聞部に逆らえる人間は校内には居なさそうだ。

「それでち～ちゃん何しに来たの？ 質問とかつてお皿に一通り済んだんじょ？」

「いやーだあ アカネと私の仲じゃないの～」

「どういづ事？？」

「幼稚園から始まつて小中高と同じ学校で家も近所の幼馴染にしては、まだまだ保科千奈という私を知らないよつね」

「…高校の願書出す時に脅迫まがいに志望校聞きだした癖に…」

仲が良さそうだと思ったら幼馴染だったようだ。そして、昔から強引な娘だったようだというデータを竜は頭のメモリーに記録される。保科千奈、危険度Aに認定。

「...」の「...」

スッと机から飛び降りて、右手を開いてこちらに掲げてくる。動作がイチイチ演技臭いのだが、彼女の場合はそれが普通なのだろう。

「久し振りにフシケンにお邪魔しようと思つたのよ。ほらほら、海洞先輩にも会いたいし、なんたつて」

「同じ穴のムジナだから… でしょ？」

「ムジナつてタヌキ?」

良く分からぬが、フシケンという所に行くようだ。

「フシケンって何なん?」

ええと論より詰拵へじへじGOへ！」

「よし、テツバツ、やでくせうん、

「誰がクサぢやんせねんつ！？」

そう言つと少女一人に手を引かれて、竜はクラブの部室が集まつてゐる文化煉がある校舎へと向かう。教室がある校舎と、クラブの部室や実習室等がある校舎が別にあつて、中庭を挟んである。その

途中で食堂と駐輪場、駐車場が広く場所を取っている。

連絡通路を歩く童達の横に、野球ウェアに身を包んだ一団が号令と共に通り過ぎる。遠くでは吹奏楽のルパン3世のテーマが流れている。とてもどかな放課後の空気と春の気配にいつの間にか気分は良くなっていた。

PM3:25

私立新海南高等学校・文化棟1階

「着いたよー」

火鳥茜を先頭にどうやら「クラブ室」に到着したようだ。その扉の前に張り紙で「不思議研究俱楽部」と書かれていた。

「ふしきけんきゅう?」

「そそ」

茜は簡単に答えて扉をゆっくり開けて中へ入つていった。

「ぶちよーいるー?」

「ども」

「はあーいカイドーせんぱあい」

中に入るとすぐに背の低い丸テーブルがあった。そこに

「やあ、火鳥君。それに保科君も。…おや？ 最後の君は侵入部員かい？ それとも新入部員かい？」

「は？？」

とてものんびりした感じの長身の男が座っていた。座っているので分かりにくいが座高は高いのでそうだろう。意味不明な事を言った彼は手元にメモ帳一枚取り出して、「新入」と「侵入」という文字を書いて竜に見せてきた。

「あ…ああ。成り行きで来てんけど…よろしく。えっとアンタが部長さんなんか？」

「失礼。血口紹介が遅れたね。僕は海洞カイドウ 風末フ3年B組だ。このフシケンの部長と生徒会会計補佐もしているので宜しく」

「フミちゃんやな。俺は草原 竜。2年C組。今日転校してきたばっかりやから色々とよろしく」

「後、下の名前は嫌いだから呼ばないで欲しいのだが、いいかな？」

「？なんですか？ 可愛い名前やんか？」

「つゆ…竜くん…あの…」

茜が遠慮がちに竜の袖を引っ張つてくる。その視線で「やめたほうがいいよ」と語っている。海洞は右手をテーブルの下の降ろしたが、その腕が震えているのが見えた。

「ん…。いや堪忍してや。悪戯に気分悪くさせつもつは無いんや」

「ほう。物分りと頭の回転が速いのだね。君は」

一瞬前まで険しい顔だった海洞はまた表情を柔らかくさせて、下げていた右手から「トンとテーブルに何かを置いた。

「ナイフ？」

刃渡り15cm、肉厚5cm程の小振りなナイフがテーブルに置かれて場が一瞬緊張する。

「危ないよ部長…」

「大丈夫ですよ。頸動脈を切るつもりだっただけですから」

「ホンマ危ないな！？アンタ！」

表情を変えずに恐ろしい事を言う不思議研究俱楽部部長は、ナイフを制服を開いて内ポケットに締まつた。後で聞いたがこれは攻撃用というよりは暴行を受けた時の防御・護身用らしい。

「何にしろ。ようこそ。草原 竜君。先程の話では転校初日といふ事だから我が部の事を簡単に説明させて貰おうか」

「あ、ああ。よろしく頼むで」

「まず…、名前から分かる様に不思議な事を研究する部だ。不思議な事というのは超常現象や、難事件、日頃から真実の分からなかつた古典的な謎何かを好きに調べて公表しようという部活だ」

「だから私達新聞部と連携しているのよ」

と、保科も続ける。

「はあ。難事件とか古典的な謎って言つのは何となく分からんでも無いんですけど…。超常現象なんてしようが無いあるもんでもあらへんでしょう？そんなんでやる事あるんですか？」

一応上級生とこう事で今更敬語（～）を使つ事を思つ出した。

超常現象とこうのは靈等も含まれるのだろうが、常識で考えればそんな物は存在しない。

それを聞いて茜が「あのね」と微笑みながら肩を叩いてくる。

「私あるよ～1・2回」

「ち…さよか。そつやんない～一生に1回あるか無いかで、しかもそれは疲れてて幻を見たとかそういうのやし…」

高速道路等で見る幽霊等も疲れ田から見えてしまつと何かの本で読んだ事を思つ出して、龍はそつ口にしたのだが…。

「一生～ひつん。一ヶ月に1・2回だよ～」

「はあ～…？」

単純に計算して一年に1・2回、人生80年として最低960回やんな事がある事になる。

「特にこの前の廊下に走る血だらけの女人にはビックリしたよ～」

「火鳥君それはもう解決済みだよ」

「えつ？」

「その真相は、化学実験をしていた女生徒が水素を爆発させてしまつて痛みで疾走していたという事らしい」

「あや～危ないねえ～」

「危ないねえ～って単なる事故やん！？」 超常現象違つし

「逆にそういう真相が全く分からぬような事件は超常現象と呼べるんだよ。何も靈魂を信じているわけじゃない。一度会つてみたいがね」

悪ふる様子も無く笑つて語る部長を睨みつけて叫ぶと、冷静に返答が帰つてくる。

「ええ～？部長それは違いますよ！幽靈は存在しているんですよ。今ここにもそこにもあそこにもー」ロイムエツサイムエロイムエツサイム我は求め訴えたり～つて

謎の呪文を唱えながら火鳥は熱弁を始めた。彼女はびしり超常現象信者のようだ。

「良く疲れからや、変な薬で幻覚が見えたとか、地盤が傾いていて家具が勝手に動いたとかしあうもない理由でお茶を濁してしまいま

すけど、本当に靈が動かしていないと証明出来ないんですよ？ 世界各国に残るそういう伝記はどういう事ですか？ ヴラードと呼ばれた吸血鬼や、中国のキヨンシー、日本には妖怪がとても多く跋扈しているでしょう？ 少し昔でも人面犬なんてのも噂になりましたよね？ それらがただの見間違いにしては田撃情報や文献が多くなると思いませんか？」

「私としてはアカネの言う事に賛成します。私自身物を書く人間なので分かりますが、無駄な事を書物に残す労力をする必要性からして、靈魂の存在は完全に否定して良いとは思えません」

女性一人はそう熱く語るのだが、この部長は眉一つ動かさずに静かに笑つて耳の少し上に手を当てる。

「逆に言えば、必要だから書物に残したんだよ。 例えば、某国の宇宙人目撃証言の話等は政府の情報操作だとも聞きくし。 吸血鬼は「早まつた埋葬」をしてしまった死者が墓を抜け出して血を吸いにやつてくるというのが始まりだけど、これは「早まつた埋葬」への罪悪感から来ていると考えられないかい？ しかもこの時の怯えた村人達、聖職者、医師、法律家は武器を携えて吸血鬼と思われる墓を暴き、その死体の心臓に杭を打ち込んだり、斧で頭を胴体から刎ねる。 これが当時の仕来りとして残つているらしいと本で読んだ事がある。 それにこの「早まつた埋葬」には恐ろしい事に近代までごくありふれた現象だつたと言うんだからね。 1980年の初め、パリで駐車場を作るために一八世紀の墓を掘り起こしたところ、墓の3つに1つが「生者」が棺桶から脱出しようと苦闘した跡が残つていたらしい」

「うわっ…」

「本当の話ですか？」

「もちろんだよ。日本でも似たような話があるけど、それは置いていて…。後、吸血鬼についてはオカルト作家の『テニス・ホイートレー氏がこんな説を言っているよ。いいかい？ 浮浪者は気象条件が厳しい折りには、墓の中に居場所を求めた』

「わざわざ墓を掘り起したんですかあ？」

「たぶんね。ええと、それで…」

海洞は思い出す為に頭の横を抑えながら続けた。癖らしい。

「多くの吸血鬼伝説はここに出所が求められる。痩せさらばえた酷い身なりのこの連中を見て、村人達は怯え、これこそ吸血鬼に違い無い」と早合点した。つて言っている。後、何も迷信深い農民達だけが吸血鬼の存在を唱えたわけじゃないよ。人体にはまだまだ現代医学では解明されない事が一杯あるからね。身体の中に聖傷があつたりとか、治癒の効力がある香ばしい油が抽出されたりとか、腐敗が早まるような形で埋葬した死体が全く腐敗しなかつたりとかね。その「腐敗しない死体」が吸血鬼に間違えられたというわけさ」

「はあ〜。吸血鬼ゆーよりゾンビみたいやけど…博識やな。流石部長してるだけあるわ」

素直に感心して竜は賛美を贈るが、部長はそれを遮つて人差し指を横に振つた。

「そんな事より、私が言いたいのは間違えた知識を持つとそんな間違つて殺された人達が浮かばないと言う事ですよ」

「その発言は幽霊を肯定してません?」

部長が語るのを神妙に聞いていた茜はその言葉を聞いた瞬間、鬼の首を取つたように微笑んだ。

しかし、亀の甲より年の甲といふか、部長は振つていた指を火鳥に向けて。

「さつ も 言つた け ど 日 本 に も 似 た よ う な 話 が あ る と 言つた だ う つ? そ う い う 信 心 は 無 意 識 に 我々 に も 植 え 付 け ら れ て い る と い う 事 を 示 し た の だ よ。火鳥君 は 鬼 じ つ こ を 遊 ん だ 事 が あ る だ ろ う つ?」

「え? ……ええ、もちろん… それが」

何か? と聞き返す前に部長が話し出す。

「あれも鬼と呼ばれた人達の悲惨な事を示しているんだよ。詳しくは自分で調べてみると良い。最近ではミステリー小説で詳しく書かれている物もあるから火鳥君にも簡単に調べられるよ」

「はあーい…。部長負けず嫌いで困りますけど一応見ときますね」

と皮肉を交えて答える茜。

「… で、結局何すんねん?」

いきなり吸血鬼の事等を詳しく語られても、部活動の趣向を分かれかねてしまう。竜には急に座談会を始めた不思議研究俱楽部部員達を交互に見てそれを伝える。

「実践で示したのだよ？」といつ不思議な事を討論したり、公表する為に記事を書いたり、記事にする為に色々調べたりするのが主な仕事かな。まあ、深く考えずにお茶でも飲んでもつたりと語ると「いつ事だけでも構わないよ」

「うーん」と部長は立ち上がり、部屋の奥にある冷蔵庫から缶にはいった緑茶を4つ持つて戻ってくる。良く見ると、冷蔵庫の他にもテレビやビデオやDVDコンポ、扇風機に温風機、電子レンジに炊飯ジャーや食器、本棚にはオカルトの怪しい参考文献だけでなく漫画や写真集もある。今座っている丸テーブルも冬場はコタツになるそうだ。大体広さ7・8畳の部屋なのでそれだけの物があると少し狭く感じてしまう。

「住み込めそうやな……」

部長に渡されたお茶の缶のフルタブを開けて、一口飲んでから竜は溜め息混じりに呟いた。それを聞いて部長が恐ろしい事を呟く。

「泊り込みで調べ物をする事もあるからには最低限の物を置いてあるんだよ」

「泊り込みまでするんかい……」

「面白いでしょう？ 私も正直最初はアホっぽいかと思ったんだけど、いつやって内面を知ると結構本格的なのが分かったのよ。それに頻繁に活動してくれるからウチの記事には困らないってワケ

「保科が来ている理由を簡単に答えると、まるでビールでも飲む様

に手に持つたお茶の缶をぐいっと一気に空けた。

「要するにオカルト研究会かいな。それでも月に1・2回の頻度で起じる事件ってのも常識や無いな」

「Jの辺りがパワースポットになつていて靈とかが集まるんだよ。そういうのを見て「裸電球舐めまわし」なんて事する困った人も出来ちゃうわけ」

「もちろんよ。さつきのお昼の質問も、私が変なんじゃなくて周りが変な人多いからそれも常識となつてるからよ。流石に地元じゃない人は普通みたいで安心したわ」

恐ろしい事を言う女性二人。

「な……なんやねんそれ……」

「補足して置けば、そんな「変態」の田撃件数は決して多い事は無いのだが……。彼女達は運命的に遭遇率が高いようだね」

「そうですね。僕が調べた内では先月は5件。今月はまだ0件ですから少ないと思いますよ」

何処か少年の様な高い声で喋る声が後ろの扉からしたので振り返ると、背の低い眼鏡の少年が立っていた。

「お、小山君おはよっ」

「おはよう御座います部長。それに火鳥さん。保科さんいらっしゃい。……最後は……誰ですか？」

小山と呼ばれた少年は一通り挨拶しながら部長の後ろに回って正面に座した。

「? なんでそないなトコに座つとんねん? 顔見えへんで?」

「え…こや…えつと、う」

部長の後ろで喋っているのであるで、部長が喋つてこよう見えてしまつて可笑しい。後ろの小山を庇つように部長は苦笑しながら。

「彼は人見知りが激しくてね。今日の所は勘弁してやつてほしい。じきに慣れるだらうからね」

「まあ、よひしゅう少年」

1歳違ひだが竜は見た目で「少年」と呼ぶ事に決めた。

「あ…はい。宜しくお願ひします」

ボソボソと恥かしかつて答える少年は、やつぱり部長の後ろから顔を出してくれた。

「まあ、これで顔見せ終わつたんやな。確か部員は4人ゆうてたやろ? 初心者やから分からん事ばつかりやと思つけど堪忍したつてな

」

「ちよつとまつたあああああああ…」

「…？」

竜が言い終わるかどうかで狭い部屋に雷鳴のような声が響き渡つた。同時に入り口のドアがガン！と乱暴に開かれる。

「俺を忘れてもらっちゃあこまるぜ！」

そう言いながら親指で自分を指して、大声で名乗る男子生徒が一人立っていた。

「なんやねん」「イツ…」

見た印象は中肉中背の普通の男だが、鋭い目をキラリと光らせた鷹のような印象を受けた。学ランのボタンは全部外されており、中には「ガンホ！」と筆文字で大きく書かれたTシャツ一枚。元気一杯である。

「誰ですか？」

それを見て小山少年はまた部長の後に隠れてしまつ。それを見て元気な男はへつ！と笑う。

「誰でしたつけね？」

部長が笑いながら言つている。顔見知りのようだからかつているのだろうか？

「誰だつたかしらねえ」

保科も部長に倣つて笑つていて。一人を睨みながら拳をワナワナ

と震えさせている元気男。

「だ～れ？」

茜は…天然であるよつだ。しかし

「あ…茜ちゃんまで…」

そこでダメージを受けて崩れ落ちる暴発男。

「なんや？誰も知らんのかい。部長、侵入部員みたいやで？」

笑いながら竜が言つと、先行自爆男は一気に復活して竜に歩み寄るど、その胸倉を掴んで

「なんだオマエはー 気に入らねえなつー！」

イキナリ殴りかかるつとしてきた。

「ちょっと田代君。乱暴は」

男は田代といひじしい。それを横に聞きながら竜は田で彼の拳だけを見ていた。

「おひつー」

気合一発。田代の拳は竜の頬を思いつめつ

「おひつー」

「オオンッ！」

殴るつもりだった様だが寸での所でかわした。田代にとつて必殺の一撃だったのだろう。その攻撃の反動でそのままテーブルに突っ込んでしまった。

「さやあー！」

火鳥の悲鳴。派手は音はテーブルにぶつかった音。木製のテーブルが割れそうな勢いで、そのまま倒してしまって置いてあつたお茶の缶が2つ転がった。そのまま田代はのびてしまった。

「なんや。自爆しよつたで？おもろいな田代ちゃん 不良なん口イツ？」

「ういう事に昔から慣れ親しんでいた 主に母親の絶対的な力等で 竜にとって、田代の攻撃は赤子同然だった。それを面白い玩具を見つけたかの如く眺めて部長に向き直る。

「あ、ああ。素行不良で良く問題を起こしている生徒だが…。草原君大丈夫かい？」

テーブルを戻して、田代を脇に退けながら部長は雑巾を探していった。聞かれて座りなおした。

「ああ。大丈夫ですわ。カスリもせーへん」

「しつかし惜しいなあ～。団らすも『転校生！初バトル！オマエは炎の転○生か！？必殺技は国電パ○チ？』が実現したのに…。一発KOじや面白くもなんとも無いわ」

田代を解放もせずに、保科は薄情な事をサラリと謎の言葉を呟つてのける。横で火鳥は田代に雑巾で頭を冷やしてあげている。勿論、こぼれたお茶を拭いた雑巾のようだ。

「つめたつ！」

それで田を覚ました田代は火鳥と田があつて表情を歪ませたと思うと、その手を掴んだ。

「え？ なあに？」

「茜ちやんー やつぱり君は優しい良い娘だなあ。介抱してくれたんだね」

お茶の染みた雑巾とは知らず感動した声で田代はやつぱりと、竜を睨んで吠えた。

「てめえ… よくもやつてくれたなー。」

「…なんもしどうくんやないか……田爆やろー。」

呆れた声で返したが、それに余計に激昂してしまったらしい、茜を押しのけて竜に対峙してきた。

「う…うるせー。 手加減して外してやつたが今度は容赦しねえー。 勝負だー！」

熱い男である。

「なんやねんな～メンドクサイなあ。大体部外者やう?はよ散れや」

「誰が部外者だ!部外者はオマエと保科だ!オレの聖域荒らすんじや」

「あーケースケひどーー」

「はいはい。田代君そこまで」

またも掴みかかろうとした田代の手を部長が止めた。

「ふざけてしまつて下さいません。草原君。彼はウチの部員の一人ですよ」

「は?」

言われて竜は田代を上から下までもう一度確認した。外見は学生服なので竜達のそれと変わらないが、着崩していく廊下で教師に会えば注意されそうな感じである。体つきも部長や小山のような文科系のようでは無く、しつかりとした…いや、少しがつしりしている。気づかなかつたが顔は結構格好良い方かもしれない。ただ

「性格悪いな」

「つんだとー?」

不良元氣少年。そんな一言ですませてしまいそうだった。

「ホンマにコイツが部員? 役立つんかいな? 空手部とかやつたらええけど、どーみても文化の薰りせーへんでコレから

「人の事「コレ」扱いするなこらあ！」

「ええ、残念ながら」

「残念つてブチヨーツ！？」

「とりあえず打てば響く 用法違うが ような性格で退屈はしないかもしれない。」

「とりあえず。これで全員揃つたようだね。彼は田代<sup>タシロ</sup> 蛍助君<sup>ケイスケ</sup>だ。主に力仕事をしてもらつてゐるが、列記とした部員の一人だよ」

「あ。ああ、田代 蛍助 16歳 二年C組だ」

部長は爽やかな笑顔で田代を見ただけなのだが、それだけで一瞬で彼は静かになつた。竜の知らない主従関係が出来上がつてゐるようだ。

「てゆーか同じクラスやん！？」

「うんうん。私と竜君と一緒にだよ。あれ？そーいえば今日見てなかつたね。けいすけ今日どうしたの？」

「え、ええつーえとけよ…ちよつとお腹の調子が悪かつたので今来た所なんです茜ちゃん…」

顔を赤くしてとても怪しい言い訳をしているが、竜も関西の学校の時はあまり優等生では無かつたので分かるが、ただ寝てたとか遊んでいただけだろうと確信した。ただ、この田代の態度も何故かす

ぐに理由が分かつた。いや、誰でも分かる。

「ええー大丈夫なわけいすけえ？」

「こに一人分かつて無い人間が居るが。

「あ…ああ、全然大丈夫！ほらここの通り！」

と両手をブンブンと振り回したものだからその腕が竜の胸に当たってしまった。

「いつたあ！ なにすんねん！」

実際は少しも痛くなかったが、狭い部屋で暴れている彼に苛立つていたのでつい語氣が強くなってしまった。

「お？おお悪い。オレ手長いから」

「あーなるほど。さつきそのながああい手が当たらんかつたんや。運良かつたんやな。よかつたよかつた」

「あん！？もつぺんいつてみろー」

「なんぼでも言つたるわ。このべタレ」

「へ…へたれ？！ 貴様あ許さん！」

「ちょ…またですか貴方達…」

そんなこんなでこの部には馬鹿が一匹居るやつで、これから学園生活に不安が混じつてしまつたわけだ。

それから彼等の事や部の事や、保科の新聞部の詳しい活動についての説明等がされた。

そうしていざ内に日は落ちて、小山少年が買つてきたジュースにアルコール入りが混じつていたりしたりして何故か宴会のようになつてしまつた。

PM7:25

神葉町内

「いや～ 茜ちゃんが家の近くやったんやね。夜道一人ちやうから寂しいないわ」

「うん～ 私もお～げふ…」

「あら。大丈夫かいな？ 飲みすぎやで茜ちゃん」

「だつてえ～。じゅーすだと思つてたんだもん… ふらふらするよお

「あ～大丈夫ぢやうな。ほら、揃まつ」

「あ～あ～ 茜君やさしいねえ… ほよほよ

などと言しながら一緒に帰るといつより護送していふような感じであるが、竜としては嫌な気分では無い。

「ちょおつとまつたあああううあ…… げほつ…」

「コレが居なければ。

「何で着いてくんねん。お前家逆おやうんかい」

グロッキー寸前の田代はフラフラしながら竜達の後を着いてきていた。

「あ……オレも西川さんを送るついでに……なんだ……ああー、ううう……」

倒れこみリバース。

「うわあ……苗助さつたなあい、さいてー」

かん

堂助最低

宝助最低

## 萤助最低

螢助心のHコー。

「あつたね…。それに、そんな足取りでどうなこせーちゃん、うんねん…。茜ちゃんもいんな状態やし…。あ…」

竜は足を止めた。「此処」で足を止めたのは一度目である。竜の前には『守矢公園』と書かれた公園がある。

「…？」  
「どうしたの竜君？」

11

「……ん? なんだ? 立つたまま寝たか?」

公園の方を見て何も言わなくなつた竜を一人は訝しげに眺めて來たが、そんな事はどうでも良かつた。

公園の方を見ると先日見た木がある。が、その下に先日の様に人が倒れていた。

「ちょ… ちょっと茜ちゃん頼むわ！」

「ほえ？ わあ！？ つて螢助くさいよお～」

「… つと…？ ゴメン！ つて、な… んだあ？ おい貴… 様… 茜ちゃんは物じや… つて待てよ…」

半ば投げ渡した感じになつてしまつたが、本当にそんな事は構つてられなかつた。竜は視力は悪い方じやないが、公園は元々薄暗く倒れた者が誰なのが分からなかつたが嫌な予感がした。

竜は倒れていた者へ掛け寄り、抱き起しあつとした。しかし、その瞬間その者は田の前から消えてしまった。

「え…」

「おーー… どうした… んだよー…」

茜を背負いながら田代が追い着いてきた。中々体力があるようだ。

「今人居てん…」

「は？ 何言つてんだ？」

「今此処に人が倒れてたんや！ お前見てないんかい！」

「はあ？ 酔つ払つて何訳分からぬ事言つてんだ…。うふう… 走つたら氣分が…」

「酔つてへん！ あれぐらいで酔つかいな！」

「うひう… 叫ばないでよお竜君…。何い？ なにがあつたの？」

「ああ、茜ちゃん堪忍。いや、此処に人が倒れとつたんやけど… 田の前で消えたんや」

「えつー…？」

それを聞いて茜は田代の背中から飛び降りた。田をキラキラさせて竜に詰め寄る。

「うつそお！ それは大事件！ 不思議事件だよお！ もー酔いなんて一発覚めつ！ でで、顔とか見たの？」

少し足取りが危ないが、氣力が勝つているのか茜は嬉々としてスカートのポケットから手帳を取り出した。

「顔？……」

「あれえ顔見てない？ 近くまで来たんでしょう？」

「いや……一瞬の事で……。いやまだよ……」

確かに一瞬だったが顔を見たような気がしていた。しかも、どうも一度見た事があるような感じまでしている。

「なんだよ……わけわからんね……ん？」

「何か見た事あるような気がしてるんやけど……」

「うんうん……それで？」

それ以上は思い出せそうに無かつた。大体こんな非常識な知り合いは居ない。だとすると

「あ、もしかして今朝の」

「え？ 何か思い出した？」

「あ、いや。夢の話なんやけど。その夢に出てきたヤツに似とったよつな……」

「夢？…あつ！もしかしてそれって予知夢とか！？」

「うんにゃ。今まで似たような夢見たんやけど一度もそういう場面に会った事は！」

そつして彼女に竜の夢の話を説明した。今朝の夢は少し刺激が強い内容なので、他に見た男女（？）の会話の夢などを話してやると、茜はますます目を輝かせた。

「す、じいよー 竜君ってサイコメトラーなんだね！」

「なー？ なんでそないなんねん！」

「だつて自分が体験してない事ばかり夢に見るつて事は何かの記憶を読み取つてるんだよきつとー！」

「はあ？読み取るゆーても普通にベットに寝とるだけやでー何かの写真を枕元に置いてたわけやないし…」

「言つたでしょ？この町全体がパワースポットになつていて

「へ？冗談ちゃうかつたんかい？」

「だから、竜君の潜在能力が増幅したのかもしれないよ？この町全体の記憶。そしてこの公園の記憶を読み取つたのかも…。あ、そつすると竜君が見たのは…この公園で死んだ人？」

「分からへん…」

頭には残つてゐるような感覚があるのだが、本当に出来なかつた。茜の言つ事が正しければ今朝夢に見た少女なかもしれないが、それとは違つといふ気がしていた。

「うーん。 そ、うだ、螢助、どう思つて、あれ? 螢助は?」

「ん?」

茜と話し込んでいて田代を見ていなかつたので、竜には分からなかつたが、見渡してみると、すぐ近くの茂みを覗き込んでいる螢助の背中が見えた。

「おーい何やつとんねん~」

「うわあ! ? ピックンさせむなよー。」

身体をピクッ と震えさせて、振り返つた彼は少し顔が青ざめていた。

「今そこに人が座つてたんだ」

「えつー。」

それを聞いて、茜も駆け寄つていき、茂みを覗き込む。

「ほえ? 誰も居ないよ?」

暗くて良く見えないが、人影はそこにはなかつた。

「ああ、だから過去形なんだ。『座つていた』って言つただろ? そ

「ここに変な髪型の女の子が隠れてた

「変な髪形あ？」

「んでも、どないしたんや？」

一瞬「変な髪形」とこの言葉に千穂を思つたが、流石にもつまひ帰つてこらだらう。

「ああ、消えた」

「消えたあ？ 蛍助酔つてたんじゃないの？」

「それは無いー。やつを吐いてスッキリしたし」

胸を張つて血の言葉では無い。

「つわづつ最低

「螢助もつたなあー」

「で、ででもー。やんと拭いたー。」

「制服でえ？ つわあ寄らなこでえー

「変態」

「変態言つなー。」

竜に向かつて激昂する。

「變態」

「△ヰ」

猿  
だ

「つていうか、変な髪形つてまさか三つ編みが混ざった感じの髪型とかちやつやんな？」

一応可能性を潰しておいたが、やがて彼は軽く援助に聞いた。

「お？ お前も見たのか？」

## 可能性復活。

「うあああ！ 千穂ちゃん何しとんねん！」

まだ近くに隠れているのだろう千穂を炙り出す。急に叫んだ竜を見て一人は驚いたが、呼ばれて茂みからガサゴソと現れた少女を見て余計に驚いた。

「ひーい！出たあ！」「きやーーーーーーーー！」という歓声を聞きながら、「変な髪形の少女」千穂が現れた。

「あれえ？ 何で分かつたの？ お兄ちゃん？」

「変な髪形やしな」

苦笑しながらその三つ編み部分を見つめる。

「なんでソレそんな少しだけ三つ編みやねん?」

「あ? 知り合いか?」

「チホ? おにこちゃん? ？」

一人には初対面の「妹」なので、竜は軽く説明しなくてはならなかつた。ただし、此処での出会い等は省略して養子で、血は繋がつてない兄妹という事だけ説明した。

「ほあ~。お前の妹にしては可愛こととは思つただ~」

「わあ。田代さんありがと~」

嬉しそうに跳ねる妹。血は繋がつてないが、一応身内になつてしまつたので、子供っぽい仕草をされるといふらが恥かしくなつてしまつ。

「ねえ。千穂さん。貴女名字は何ていつの?」

何か茜が、先程より元気が無いよつて見える。神妙な顔で千穂に質問した。

「え? 草原だよ? お兄ちゃんと一緒にだよ。当たり前だけど」

「違うの。ええと…」

茜は何かを考え込んだよつて間にシワを寄せ、思いついたよう再度質問した。

「養子の言ひたわよね？ 前の娘が向ひの？」

「前？ え～と森川だよ」

「やあ。モリカワさんね。あいがと」

「うつとうとそれきり茜は黙りてしまった。

竜達が訝つていると、茜は思に出したように「帰る」と一言残してその場を立ち去った。それを追つて、田代も着いてこいつとするが、断られたようだとボトボと逆方向へ歩き去った。

「なんやつたんや？ 最後の茜ちゃん。……まあ、千穂帰らか

「うそ。」

草原家

PM7:56

「ただいまー」

「ただいま」

「あー、お帰りなさい。遅かったのね？」

家に帰るとエプロン姿の母が出迎えてくれた。玄関に靴があるので父も、もう帰っているようだ。

「ああ、なんやイキナリ部活誘われてん。そのまま侵入部員歓迎会ぽい事になつて遅なりましたわ」

「部活？アンタ前は万年帰宅部だったのに珍しいわね？」

「前は前や。新しい環境には巻かれるもんやで？」

「えつらねうへん。それで千穂も？」

「ううん。私はお兄ちゃん待つてたんだよ

「やうやつたんか？」

「やうやく。それなのにお兄ちゃん全然姿見せないから公園で待つてたんだよ？ひどいよ」

「やうやつたんか。寒いのに堪忍

「何？一人でこんな遅くまで公園に居たの千穂？貴女、女の子なんだから危ないわよ気をつけないと」

「うん。今度から気をつけよう

今まで子供は竜だけだったので、母の千穂の可愛がりようは竜には異様に感じた。その視線を鋭く感じたのか母はこちりを睨んでくる。

「まつたく。アンタが遅いから千穂を危険にさせりしたんだからね？」  
今日は晩御飯のオカズ一個マイナスよ

「はあ！？ そんな殺生なあ～～

「ちなみに今日はエビフライよ

「おかん――――――殿中ですぞ～～～～

「……お兄ちゃんそれ用法違ひ……」

そんなこんなで竜の学園生活一日四五年終了した。

4月5日AM7:00

草原家・竜の部屋

..... ﻢﻟﺎﻌﻟا ﻢﻟﺎﻌﻟا ﻢﻟﺎﻌﻟا ﻢﻟﺎﻌﻟا ﻢﻟﺎﻌﻟا ﻢﻟﺎﻌﻟا ﻢﻟﺎﻌﻟا

田覚ましが5回鳴り終わる前にスイッチを押して止めた。一応低血圧では無いのですぐに目が覚めた。今日は夢は何も見なかつたのは疲れていたからだろう。昨日、千穂が夜中過ぎに部屋に来てカードゲームを挑んできたのだが、意外に久し振りにやると熱くなつてしまつて気がついたら3時を回つていた。それから寝たので4時間睡眠だが、意外に眠気はあまりなかつた。

今朝は寒く、外は雨が降っていた。こんな日は普段なら体調が悪いハズなのだが不思議とここまで気分が悪いという事はない。それも、人肌で温まっていたので気持ち良く眠れたおかげかもしない。

「！？！」

声を上げそうになつたが、流石に朝方なのでムリヤリ押し殺した。

？」

竜の横に千穂が眠っていた。竜が身体を起こしたのに反応して彼

女も目が覚めたようだ。

「はふ……おにこちやんおはよー ふえ?」

一応千穂は服を着ていた。有り得ないが間違いが無かつた事が分かつて竜は安堵したが、それでもこの状況はよろしくない。お約束のように竜の手が彼女の胸を驚撃みにしていたのだが、一瞬で手を引いて誤魔化した。

「お・・・おい。何でそこ寝とんねん!」

本当は大声で叫びたかったが、この場に声を聞きつけて、母が来た場合を考えて最小限の声で激昂した。

「あはは。暖かかったねえ」

「そんな事聞いてへん! 節度無いんか! !?」

「ううん。だつてお兄ちゃん襲つような人じやないのは分かつたから。別に兄妹だし寝ても問題無いよ?」

「血い繋がつてへんし、元々他人や!」

「ええ。大丈夫だよ。こいつのは意識のもんだ……。問題あるみたいだね……」

「おお? そりやせうや。問題ある。よーわかったやんか……って何処見てゆーて……あ……」

千穂の視線は竜のズボンの方に向いていた。

今は朝だ。

朝だからこうなつた。

朝だし

今日も元気一杯だつた

お兄ちゃん

「... これはちが... 朝には男はみんな

いや、さて、最後まで聞いてい

言い終わる前に部屋のドアがバタンと閉じられた。

草原家 · 居間

「はよー もーにん」

「おはよーひーじゃこまーす」

「おはよーつ竜、千穂」

居間へ行くと母が朝食を用意していた。食卓には大根の味噌汁とチーズ餃子が並べられている。

「チーズ餃子?」

「そんな名前じゃないわよ」

形状はそんな所だが、たしかに中華では無い。母の得意料理の一つで名前は知らないが、結構美味しい。メリケン粉の皮に溶いた卵と小麦粉をかぶしてそのまま焼くんだそうだ。

「朝から高カロリー やなコノ」

「チーズは身体に良いんだからいいのよ」

フローリングの居間のテーブルを母と、千穂と、竜の3人で囲む。父はまだ寝ているようだ。

「おとん今日休みなん?」

「今日は昼から少し顔出すだけらしいわ。良い身分よね移動してきたばっかりなのに」

味噌汁を一口飲んでから食べ始めた母に、欠伸混じりにそう聞くと母は顔をしかめながら言った。

「お父さんは何の仕事をしているの？」

昨日、父とは夕飯で少し顔を合わせただけの千穂は、お茶と一杯飲み切つてから御飯に箸をつけていた。竜はまず米である。一見して見ると癖というのには違うものだと思った。

父は出版社に務めているのだが、竜も詳しくは知らなかつた。答えに困つて母を見ると既におかずの大半を平らげていた。いや、いくらなんでも早い。

גַּתְתָּאָרָה, עֲרָבָה

やつは早口で言い終わるとそのままくせと、母は洗い物を始めた。分からずぎるが逃げている。

？」

「千穂。早く食べて着替えてしまいなさい。貴女まだパジャマでしょ」

「はーい」

言わされた通り千穂はピンクの半纏を羽織っていた。その下は黒猫のプリントがしてあるこれも地がピンクのパジャマだった。勿論これは千穂の持ち物で無くて母の物なので少しサイズが大きい。

腕が出ない袖をパタパタ振りながら2階にある血圧室へ向かつ千穂。

2階は竜と千穂、母と父の寝室に書斎がある。

竜も食べ終わり、着替えようと部屋に戻りがてらに母を捕まえた。

「なあ、おかん？ なんでおとこの仕事の事黙つてたんや？」

「は？ 何の事？」

「は？ やないて。別に裏家業やあれへんねんから黙つとったら余計怪しいで？」

「いやら何でもあの場で、母の態度に気付かなかつた事は無いので、その辺は省略して竜は問い合わせたのだが母はそれも無視して洗濯物を干しに行こうとした。

「ちよ……ちよっと……」

その後を追あうとした竜に気を止めずに、母は行ってしまった。流石に強引に止めようとも思わなかつたので竜は仕方無く支度に取り掛かった。

竜の家から学校まで徒歩で20分程で着くので、気になる程では無いが、着いた早々に机に突っ伏している竜を見つけて茜が挨拶しながら顔を覗き込んできた。

「おはよー竜君。どうしたの？ 体調悪そうだね？」

その声に反応して顔を起しすと昨晩の真剣な顔は無く、いつもの明るい顔があつた。

「ああ、茜ちゃん。はよもーこん

「何語？」

「あ、いや…」

寝惚けていつも家であるような挨拶をしてしまつて竜は舌打ちした。これは竜のオリジナルの挨拶で「グットモーニング」と「おはよー」を足した言葉だ。幼少の頃から気に入つて親しい者にはこれを使うのだが、何か説明が恥かしくて、口からではこの挨拶は封印していたのだが。

昨日一日である程度打ち解けてしまつたのだろうか？

そんな事を自問していると、茜は「？」を浮かべながら自分の席竜の斜め後方に戻つていった。

それに入れ替わる様に今度は保科が現れる。

「おひはよおー 転校生君。今朝の記事が出来たわよー。」  
「おひらが驚いているのに構わず保科が持っていた紙の束を開いてみせる。

そこには

『転校生初バトル！お前はリアルバウトの回し者か？必殺技は0・5秒の神速避け！』

…等と書かれていた。

「まてやーーーーー！」

「あん お気に召してくれたのね！」

「なんでやねん！思いつきり事実捏造すんなやー！コレもしかして昨日の田代とのヤツやろーーー？」

その記事の端に「フシケン」の部室が写っていた。そしてそこには部長のコメントまでもあり、最後には「勝者インタビューは後号！」と書いてあつたりする。

「いやー。あれから部の皆に話してみたら「それでいきましょー」

つてなつちやつて あ、教師方面には「あらから話してあるから問題にはならないわよ」

楽しそうに語る保科を見て、呆れながら記事を読み返した。

なるほど。退屈な日常には刺激的で面白やつの事件ではあるが、その当事者としては迷惑である。名前が売れる。とか、そういう問題では無く、人権無視も甚だしい。それにこんな記事を読めば

「「おらあ——ほしなあ—」

「あられえ？けーすけえ～おはよ～」

「ねつせよーじや ねえつ！なんだ！」の記事はあ—」

もう一人の当事者「田代 勇助」にはたまつたものでは無い。

「「めんね～？あまりに一瞬で負けたっていつのが意外だつたし～。それにしても今日は早いのね？」

「ああ、今日は妹に…。つて！そんな事よりその「負けた」つてのが納得いかねえんだ！オレがいつ負けた！」

「激昂は！」もつとも～。でも経過と結果どうから見ても「負けたで構わないって血のよ～」

「誰が！？」

「クサハラ君が～きやつ」

そう言つてチラリとこちらを見てくる保科。それを聞いて田代が鬼の形相で向かつてくる。

「な……そんなん何時言つてん！？」

当たり前だが抗議すると、保科はサラッと一言。

「昨日の部室で午後3時50分……なんもしどらへんやないか……自爆やう？」という発言を元に考察しました。てへー

それによつて田代を軽視したという判断らしい。時間等が一瞬で返つて来たのは何かで測つっていたのだろう。

なんにしろ、田代がこちらの胸倉を掴むまでの時間に短く言い終えると、彼女は早々にその場を少し離れて非難している。

「てめえ！ 昨日は大人しくしてたが、もう許さねえ！」

「お……落ち着けや！ 今日はそんな気分ちやうねんて！」

今日では無くとも、基本的に暴力沙汰だけは避けたかつた。転校2日目からまた転校したくは無い。前の学校でも暴力事件を起こしたのだが、それも彼には非が無い事件だったのだが、結果的に彼が全てを請け負う形になつただけだ。

友達がイジメられていたのを助けたのだが、その事が担任に知れ、「お前は最低の人間や」と言われた事に嫌気がさしてついでに教師も殴つただけだ。自分に非は無い。

そんな事を思い出していくと、右頬に強い衝撃を受けて倒れる。

殴られたよつだ。

「いっただ！なこひらすねん！」

殴られた右頬をさすりながら起き上がると、今度は顔面を狙つた拳が見えた。

「おらあ！」

物思いに耽つていた先程とは違い、今度は難なくそれを避ける。竜は手早く立ち上がると、田代の鳩尾を狙い、鋭い蹴りを放つ。ヤクザキックといふヤツである。

「ぐはっ！..」

急所に綺麗に入つて倒れこむ田代を見ながら、冷やかな視線を避難している保科に向けた。

「お前ええかげんにせえよ？」

「え？ 私？」

保科は投げかけられた言葉の霸氣に怯んで冷汗を流しながら答えた。

「お前やー、面白い記事かなんか知らへんけど、アンタが焚き付けてバカが怪我して、責任取れんのかい！」

「ええと……そんな事言われても、これは娯楽の一環で……」

少し涙目になつてゐる保科を見て可哀相にも思えたが、自業自得である。こういう事ははつきりとケジメを付けないと気がすまないので、竜は呼吸を整えて告げる。

「つるさいわ！ アンタ… 田代もよう聞いとけ！ 僕は、僕に危害加えてくるヤツは容赦せえへん。言つとくけど手加減でけへんからな？ 命までは取らへんけど、格闘術はほぼ素人やから保証せえへん」

「……」

竜が言い終えると、教室内は静寂に包まれた。言われて田代は震えながら立ち上がりつゝいる。保科は放心したよつこちらを見ている。他の者は…、事情を知らないまでも、重苦しい雰囲気に田を逸らしているが。

「分かつたんか。保科、竜助」

「お…」

「お？ なんや？」

「面白…」

保科が下を向きながら近づいてきた。

そう言つて顔を上げた保科の田代はキラキラと輝いていた。

「はあ…？」

「いい！ 断然良い！ これこそ漢字の漢と書いてオトコだね！ 心意氣やヨシ！」

「な…なやんねんそれ！ お前俺の言つた事聞いてへんかったんかい！」

「よく聞いたわよ つん私惚れそつよ」

保科は楽しげにそんな事を言つてくる。

「クサハラあ！」

そこに田代が拳を震わせて復活していた。

「カツコイイ事言いやがつて！ 格闘術は素人？ へつ！ 知るかそんなもん！ 誰が自分の身が可愛くて殴るんだよ！」

ひづらにも馬鹿がいる。

「董助！？ お前も何言つてんねん！ こんな茶番つまらんやろ！？」

「つまつまうにじやねえよ！ これはオレのプライドをかけた戦いだ！」

熱い。

「ひあ～。ち～ちゃん！ けーすけ！ 何してるのよ！」

そこにやつと茜が割り込んできた。今まで傍観していたようだが、

流石に收拾がつかなくなつてゐるので出てきたといったところか。

「ち～ちゃん！ 昨日転校生に迷惑かけちや駄田つて言つてたでしょ忘れたの？ それに嵐助！ 昨日から竜君にちよつかいかけてるけど何か恨みでもあるのー？」

「あ、そろそろHMRだわ～戻らないと～」

そう言つて保科はそそぐと自分の教室に戻つていく。

「う…茜ちゃん。これは…」

「言ひ訳無用！ ちゃんと竜君に謝りなさいー！」

田代が言い終わる前に茜は激しく田代を叱責する。元々、田代は茜に弱いが、ここまで真剣に言わると素直に「迷惑かけたな」と頭を垂れてきた。

「あ…ああ、分かればええねん…」

そんな田代と竜を身がないカンカンと頷く茜。

この学校で一番難敵かと思つた保科より強い彼女は、実質上学園最強のようだ。普段の可愛らしい印象も、こんな折には逞しく見える。

昨日の人懐っこい彼女。

部活での元気一杯の時の彼女。

昨日の公園での彼女。

そして今、彼女。

竜の知らない彼女がまだ色々ありそうで見ていて飽きない。彼女と同じ部活になつたのは正解かもしれない。最低でも退屈はしない。

「覚えとけよ」

そんな事を言いながら田代は自分の席 竜の真後ろ に戻つていつた。それに茜が「こらー」と言つてゐるのを横田で見ながら担任が来るのをまた机に突つ伏して待つた。

早く静かになつてほしい。

そう強く願いながら。

PM0:15

新海南高等学校・2年C組

お昼になつて、竜は手提鞄から弁当箱を取り出した。もちろん母が作ってくれた物で、今日のおかずはワインナーと卵焼き、カボチャの煮付けにミックスベジタブルの炒め物だつた。ちゃんとお新香も入つてゐる。御飯はおかずと別にもう一箱あり、そちらには肉そぼろが敷き詰められていた。

皿つまでも無いが、早弁はしていないので満載である。

それと水筒にコーヒーを入れてきたので暖かいまで飲める。御飯にコーヒーといつのは人に気持ち悪られるが、竜にとつてコーヒーは水のような物なので、あまり気にした事がなかつた。

「りゅーくん

まだクラスメイトと親しくないので一人で食べていると、茜がやつてきた。手には可愛いサーモンピンクの包みに入った小さな弁当箱を持っている。

「一緒に食べよつよ。竜君」

そう言いながら、前の席の机を勝手に動かしてこちらに向かへる。その机の主は、食堂に行つてゐるのか不在だった。

「あ…まあええよ」

女子生徒と一緒に食べるのに恥かしさを覚えながらも、そう答える竜に、茜は笑顔で頷いて包みを開いた。楕円の弁当箱にはおかず半分、御飯半分。竜の4分の1の大きさの箱に収まつたそれを見ながら、「それで足りるん?」と聞くと茜は笑いながら「いつも残しちやうんだあ」と答えた。

「あ——！」

そんな声が突然響いた。見るとそこには手に菓子パンと牛乳を抱えて教室に戻ってきた田代が、こちらを指差して叫んでいた。

「てめえ！ なんて事してやがる！？」

意味が分からなかつた。「食事している」と答えればいいのだろうか?

「どうしたの？ 蛍助？」

茜にも分からぬよつで、疑問符を二つ頭の上に裝備しながら田代に聞くと、その反応に衝撃を受けて彼は頭を抱えながら三口りと後退した。

「あ…あかねちゃん…。オレが誘つても一緒に食べててくれなかつた  
じゃないかあ…」

なるほど。嫉妬しているらしい。

「え？ そんな事あつたっけ？ けーすけいつも昼頃になつたら席

で食べず」にこる事あるナビ…。もしかしてソレ?」

「…ええと…」

あか「ひねまにひつたえてこる。ビ「ひやひ跡[迹]のよひだ。

だが、それだと、ビ「ひ物えても「誘つて」いない。かなりの奥手らしい。

「なんだ～。口で言つてくれたらこつでも一緒にしたのに～。だめだよ～？ちやんと口で言わないと」

「あ…マジっすかあ！？」

茜の言葉に田代は急いで椅子を持つて来て、竜の机の横につかる。そのまま上機嫌に菓子パンの袋を開けて、食べ始めようとしたが、その前にじりりに顔を近づかせて来た。

「おい。今日はお前のおかげだ。海より深く感謝する」

と、良く分からぬ礼を言つてくれる。そうして笑顔のまま食べ始めた。

「なんや、お前調子ええなあ。今朝の事忘れたんかい…」

呆れて言つていひの声も聞こえていないのか、彼の笑顔は崩れなかつた。

「董助も悪い子じやないんだよ？ 今朝はきっと氣が立つてたんだよ。ほら、全部ち～ちやんが悪いんだよウンウン」

「セツセツ。あのバカがあんな事書かなきや殴りてねえよ」

と、茜の言葉に続いて調子の良い事を語つてゐる。

「簡単にキレるんは悪いなーんか?」

卵焼きをかじつながら顔をしかめてセツセツ

「まあ、元々氣に入らなかつたが」

田代はやはり笑顔でそんな事を語つた。

「なんやねんソレー」

「うむせえな最初はお前が…」

セツで凶切つて田代は小さな声で耳打ちしてくれる。

「西田ちゃんにちよつかい掛けてるかと思つたからな」

「はあ?」

そして離れて笑いながら

「まあ、普通みたいで安心したぞ」

等と語つて牛乳パックの中身を一気に干した。

「?」

それを見て茜は、当たり前だが分からぬといつた顔をしている。

「あほか…。思い込みの激しいやつちやな…」

「あはは～。けーすけは昔からそつだよね」

「おう！ オレは昔から一途だぞー！」

「誰に？」

茜は首を傾げる。物凄い鈍感というか能天氣な女の子だ。

「そ……それは……」

流石に聞き返されると思わなかつたのか、田代は視線を泳がせて  
いる。

「うー…。あ、あれ保科じやねえ？」

「ん？」

彼の言葉に教室の入り口を見ると、姿勢を低くして入ってくる保  
科が見えた。

「あれ？ ちーちゃん～？ おーい

保科を見つけて田代への質問はじつとも良つか、そちらに意識  
をむけたようだ。

やつされて、安堵と不満に思つたのか近づいてくる保科を睨む田代。

「は～い ラインハルト」と保科千奈ただいま参上！ えへへ～  
茜～」

上田遣いに茜を見て、手に紙袋を抱えていたのを茜に差し出す。

「うん？ 何これ？ … わあ 文保堂のワッフルじゃないや  
や～」

田をカラキラさせて、紙袋の中からワッフルをひとつ取り出して  
口に入れれる。

「ぶんせきじつ？」

「うんうん。ベルギーワッフルに続いてこの近辺では有名なワッフ  
ルのお店なんだよ おいしい～… つて食べてよかつたのかな？」

「口に入れてから聞くとは相変らずね…。えつと、今朝のお詫び。  
ちゅうとやりちぎだつたかなあつて思つたから走つて買つてきたの  
よ」

「わ～ そんなのいいのに～ち～ちゃん大好き！」

「ふ～ん。保科つて意外に良い奴やねんな

今朝はそのまま逃げた形になつたが、いつやつて詫びに来るのは  
中々出来る事では無い。いくら自分に非があつても、中々謝つたり  
出来ず、そのままの者が、ほとんどのハズである。

もし、自分が同じ立場ならそのまま逃げていたかもしれない。

そう思つと、いの保科という女に好感が持てた。

「これ、俺も食べてええんか?」

美味そうにほづばる茜を見て、竜も涎を垂らして見てしまった。元々甘党で、これは秘密だが、たまにお菓子も作つたりするのである。出来たてのようで、湯気を立てているワッフルを前に黙つていられない。

「ええ。いいわよ。ダーリンも」めんね?」

「ええてええて、氣にしてへんから…。おつ美味そつやなコレ。俺はチョコワッフルかハーネワッフルか悩む所やけど…」いはプレーンでええか」

そうやって三人が嬉々として昼飯後のお茶会をしていると、田代が少しつまらなそうに見ていた。

「なんや?お前食べへんの?」

紙袋の中にはまだ6つ以上残っていたので、たぶん彼の分もあるようだが、彼は手をつけなかつた。

「俺、甘いのダメなんだよ」

「や… やよか… もつたといないなあ」

流石に甘党じゃないとこの砂糖タップリのワッフルは辛いかもしない。歯が痛くなりそうな程甘い。チヨコワッフルはそれほどでも無かつたが、プレーンは常識より1・5倍程砂糖加減が増しているようだ。

「ううふふ～ 新聞部の情報網を舐めて貰つたや困るわよ？ けーすけ。アンタにはコレよ」

「お？ ……おお！ それはっ！」

何処から出したのか、保科は今度は何かの缶と、ポリエスチレンの袋を取り出した。

一つは緑茶の缶と、もう一つは煎餅だつた。

「お煎餅好きだつて聞いたから雷門近くのお店の草加煎餅！ 特派員にお願いして買ってもらつてきたのよ。それに甘いのが苦手つて言つても洋菓子がでしょ？ 和菓子はいける口だつて聞いたわよ？」

「まあ、最中とか小豆だつたらな。くう～それにしても、お茶は仕方無いが、これは泣かせるじゃねえか」

田代のお茶菓子も揃つて、改めてお茶会が始まった。

「…しかし、アンタ今どつから出したんや…」

「女の子は隠す場所が一杯なのよダーリン」

訳が分からぬ事を言つてゐる。しかし

「そのダーリンってなんやねん！ セッキから」

聞き捨てならぬ言葉を聞いて今度こそ咎めると、保科の様子が一変して艶っぽい感じに上田遣いをしてくる。

「あ～ん 今朝ので惚れ切ったって言つたでしょ？ 有言実行の女よ私は。きゃ」

「なんやでー？」

「おお！ 草原、良かつたな！」

「ええ～！ ち～ちゃん本氣い？」

それそれに驚き 一人は喜んでいるが の声をあげるが、保科は横から腕を絡めてきた。

「もちろんよ～。私の身体にビビッつて来たつていつか、もう運命つて感じ？」

「ななな… なんでやねん！」

保科は自分の胸を押し付けるように密着してくるので、恥かしさで動搖して声が震えてしまつた。しかし、流石に振りほどくのも気が引けるので、睨みつけるが、保科は逆にその視線が違う意図を示したと思つたのか目を閉じてきた。

「ほんとのお詫びは… わ・た・し

「……」

口を尖らせていりながら、保科を、無言でやのショートボニーを握んで止める。

「あやあー、いつたあー。」

「迫んなー、ちよつと見直したら「コトかーー。」

「ええー、ダーリン私の事嫌い?」

「そ…それ以前にアンタとは昨日会つたばっかりやうー? そのダーリン言つのもヤメえ!」

保科も強引な性格で、変な所はあるが、別に可愛く無いわけではない。そのショートボニーも少し子供っぽいが、似合っているし、意思の強そうな眉と悪戯っぽく輝く瞳も悪くはない。だが、イキナリこんな事をされても困る。据膳喰わざはなんとやらと言つが、そこまで鬼畜では無い。

「じやあ、せめて「竜」つて呼び捨てていー? いいよね? 茜も名前で呼んでるんだから」

「ちよまで…まあアンタ言つても分からんみたいやし、呼びがへいええよ。ただ、それぐらいで「惚れたはれた」言つてたら世話ないで…せつねこのお互いに知らなあかんやろ?」

それを聞くと保科は大きく首を振つてショートボニーを揺らせた。意識して見ると、可愛い物だ。

「はあ～。でもち～ちゃんつてそういう方面は全く興味無いと思つてたよ。素直に驚きだね」

茜はワッフルを一通り征服して一心地着いたように溜め息混じりに言つてきた。

「そう？ 今まで部活一筋だつたけど、彼つてカッコイイでしょ？ 乙女としては当然の反応よ。そうだ。茜はどうなのよ？」

「ええ！？ 私？」

「そうよ～。人の事より我が身を心配しなさい。アナタだつて部活一筋じやないの」

保科に言われて「あはは」と苦笑いを浮かべる茜。それに静かに田代は聞き耳を立てていたが。

「考えた事も無かつたよ。私なんてち～ちゃんより全然可愛く無いし」

「そんな事ない！」

「そんな事ない！ 茜ちゃんはビーナスだ！ 太陽だ！ 絶対神だ！」

保科を押しのけ田代が鼻息荒く激しく異議を唱えた。彼にしてみれば「惚れた顛履目」があるだろうが、竜の目から見ても、茜は希に見る美少女だった。性格は保科より強引さが無いが、少し難がある。しかし、見た目と雰囲気だけを見ると可愛い。ショートカットで少しボーカルな印象を受けるが、大きな瞳と、そのあざけ

ない笑顔で確かに、田代の言つ「ビーナス」と言えなくも無い。ただし、少し幼いビーナスだが。

「あ、ありがとけーすけ」

と少し顔を紅潮させる感じもGOOD。

「何にせよ、好きな人出来たら我が新聞部恋愛コラム部に連絡してね。待つてるわよ」

それを聞いて竜は先程の記事の端に「恋愛コラム・恋愛相談も請け負っています。お気楽に参加よろしく」と書いてあるのを発見した。その下に「今月のカップル」という所に「藤田啓太＆芳川愛子」と描かれた所に一人のコメントが書かれている。「私達とっても幸せです！」と顔写真付きである。しかし、流石に此処に列記されるのは遠慮したい。

「じゃ、竜。此処に私達の事書いておくから後でコメント頂戴ね」

保科、言つてる側からこれである。

「ひひあ————おのれは勝手な事ばっかすんなあ！」

そんなワッフルのような甘い時間（？）を過ごした今田の顔。

とても平和だった。

そして、時間は放課後。  
茜の時間になった。



PM3:21

新海南高等学校・文化煉1階不思議研究部室

「あはは。草原君も災難だつたね」

部長はお皿の話を聞いて、のん気に笑つてお茶を啜つていた。  
「ぶちよお～。笑い事やないですよ。人の身ににもなつたつて下さ  
い」

「もじるつて事は良い事だよ?それに彼女はこの学園のトップクラスの権力も持つていて。学園  
生活が充実するだらう」

「好きでも無いんに構われたら良い迷惑ですわ」

「あれ? 竜君つてち～ちゃん好きじやなかつたの? じゃあ悪か  
つたね～。止めなくて」

天然娘はやつぱり分かつていなかつた。

「ま…まあ、人間的には好きな感じがしたんやけど、あの強引さが  
あれへんかつたらなあ」

「それを言つのは酷だね。彼女に強引さが無くなつたら何が残るの  
か」

部長」)も「それを言つのは酷」である。

「そこまで言つますかぶちよー

「あのー

そう朗らかに三人で話していると、今日は普通に顔を出している  
小山少年が割り込んできた。

「そんな事より、僕は昨晩の竜先輩の事件が気になつていて  
けど」

何処から情報が漏れたのか、小山少年はそんな事を言つてきた。

「な…なんで少年が知つとるねん?」

当然と言えば当然の疑問に、小山少年はニヒルに笑つてこう答えた。

「そりやあ、後を着けてましたから

「はあ!?

「小山君。 一步間違えれば犯罪だよ?」

「情報集めは僕の専売特許ですか?」

流石の部長も顔をしかめて彼を嗜めよつとしたが、彼はハンディ  
タイプのビデオカメラを片手にして得意げに言つ。

「いいか少年。そういうのはストーカーって言つんや」

「女性のいやらしい画像が欲しいわけじゃありませんから問題ありませんよ?」

「列記とした人権無視や!」

「だつて、昨日竜先輩とは殆ど喋つてないじゃないですか。だから交流を深める為に情報が無ければ不安になつてしまいりますよ。あ、それと昨日もう一人居た「田代」って方も僕は知りませんでしたから調べさせて頂きました」

「ん? そうなん?」

言つても無駄のようなので、とりあえず盗撮の件は置いといて、少年が田代と認識が無いというのに疑問を感じた。一応部員であるのに。

「けーすけあんまり此処に来ないから」

と茜が言つと

「そうだね。彼は週に一回ぐらい来ているが、部室を覗いてはすぐ帰つてしまふからね。特に火鳥君が居ない時は」

と部長が続ける。田代は茜田並で部に来ているようだ。

「それで、丁度今まで会わなかつたんか。へえー。」

「そんな事よりも！ 昨日の話を。僕は昨日遠くからしか見ていない  
かつたので良く分からんんですよ」

「ふむ。興味あるな。竜君お願い出来るかな？」

中々こいつ事になると人間が変わるようで、小山少年は鼻息が  
荒かつた。見た目は少女のようなのに、それだけみるとただの変態  
に見える。いや、この部室に居る者全員がそうなのかもしれない。  
自分を除いて。

「詳しい事は俺にも分かってへんけど、昨晩守矢公園で人が消えた  
んや」

「人が？ 神隠しか何かかい？」

流石にこいつは部の部長である。こんな話を聞いても全く動搖が  
無い。それだけでは無く、キチンとメモの用意まで始めた。

「いや、神隠しかどうかも分からへん。ただ、その顔に見覚えがあ  
つたんです。ただし、夢の中で見た顔ですけど」

「ふむ…サイコメトリーか」

「あつ部長ー やっぱりそう思います？」

部長の言葉に茜が嬉しそうにした。

「サイコメトリーって何でしたっけ？」

小山少年はそう言って、部室の本棚を眺めながら言つ。

「ESP能力。要するに俗に言つ超能力だね。起源は忘れたが、サイパワーを持つて物品等の記憶を読み取るよつた能力だね」

「ふむふむ」

小山少年は本を探すのを諦めたのか部長の話を聞いている。その本棚には色々な本があり、そこから一つの事を探すのには苦労しそうな程の蔵書があつたので、知つてゐる人に聞くといつ彼の判断は正しいかも知れない。

「ESP 超感的知覚 は「靈媒性トランス」、「自動運動」、「瞑想」、「夢」などにともなつて、時折発生する。1902年のマイヤーズの記録から1962年のJ・E・ラインの記録等がある。その後の、1960年代の行動主義心理学全盛の背景を考えれば、初期のカード当てテスト・パラダイムの提唱者達が、健康状態や、異常刺激の効果、未知の観察者達の影響等の比較的総合性を持つた行動主義的尺度に目を向けて、概ね、被験者達の心の内的状態を気にとめなかつたのも無理は無いよね」

「意味分からぬよお」

茜が非難の声をあげてゐる。果たして、小山少年は分かつてゐるのか「ふんふん」とそれを聞いていた。

「まあ、夢を媒体としたESPの報告は多数あるといつ事だよ。とある調査では全体の65%を占めていたらしいよ」

頭に手を当てて話す部長。

「で…でも、公園と俺の家から10分ぐらい歩くで？ そんな遠くの事の記憶読み取るいうんですか？」

「いいかい？」このサイコメトリーの凄い所は、横は45マイル、上には60フィートの事まで読み取ったという記録もあるんだよ。遠く離れた町からでも受信する事が出来るんだね」「離れた町からでも受信する事が出来るんだね」

そして「ESP／超心理学の実験と研究」という本を手渡してきました。読めとこうのだろうか？

「それにしても、部長って信じてなって言つてる割にそんな事を鵜呑みにするんですね？」

「「ああ」と仮定しての話だよ火鳥君

「うへ素直じゃない

茜の呟きを無視して、小山少年は話を進めた。

「で、草原先輩の事はそのサイコメトリーだと？」

「私は、そう思つかな。ただ、何故火鳥君がそう思つたのかが気になるね」

「え？ だって夢の中で」

「夢の中で見たという事＝サイコメトリーという発想が出てくる理由がありそうな気がしたんだけどね。思い違いなら失礼」

「もちろん。いつも環境に屈ればすぐに御つりますよ」

そう言つて部室全体を包むように両腕を広げてみせる茜。そうしてみても、彼女の両手では全体を包むのは無理だが、そうされて竜にはこの部室全体が紫色の空氣に包まれてゐるよつた気がしてならないかつた。怪しい。

「わづかーい？ 私はてつきりあの公園であつたあの事件の

「部長ー。」

「ん？」

「その先は言わないで下さい。はー。部長の仰る通りです。確かに「その事」があつたからすぐに思いつきました」

その時の顔は昨晩の彼女の顔だつた。彼女の顔を見て、短く嘆息して部長は話をするのを辞めた。

「火鳥君。許してくれ。これはただ的好奇心の発言だ。話を戻そ  
う。 草原君、その顔は少女じゃなかつたか？」

「えー？ええ、そう言われてみればそんな気がしますわ。後、夢の話ですけど若い男も居ましてん」

「男？」

「顔は見てへん… というか良く分からへんかったんですけど、暴力  
しとりましたわ。その少女に」

それを聞いて部長と茜が表情を険しくする。小山少年は特に変わ

らずメモを取つてゐるが、この二人の変わり様はハツキリと分かつた。

「いやに鮮明だね。草原君もしかして…だが、君は「最後まで見ていた」のか？」

「？」

疑問符を浮かべると、部長は咳払いをして言い直した。

「失礼。その少女がどうなつたか知つてゐるんだね？」

最後…。夢の中で少女は、若い男に何度も殴打されて殺された。とても氣味が悪い夢だつたが、部長の今の言葉で鮮明に思い出しそうな吐き氣がしてきた。

「火鳥君…。これはちょっと事件だ」

部長は竜の反応を見て肯定と取つたようだ。

「……」

茜は部長の言葉にただ頷くと、一いちらを見据えている。その顔には何かの「意思」が込められてゐるようで力強かつた。

「火鳥君…。君が良ければ彼に話したいのだが…いいかな？」

「部長…？」

「彼はここまで知つたのだ。全て知る権利があるだろ？」

「そ……やつですけど……。夢の話ですよ？」

「君がその能力を信じたからこそ言つたんだろ？ サイコメトラ  
ーと」

「あの……何の話しどるんですか？」

二人は何かを知つてゐるようで、秘密なやり取りをしてゐるので、  
たまらず竜は問いただした。

「ちょっと待つてくれるか？ 今火鳥君の了承を」

部長が説明するのを茜が止める。

「いいです。部長」

「ん？ 火鳥君？」

「私が話します。その方が正確ですから」

「……他人の私がしゃしゃり出ではいけないか。火鳥君に任せるとし  
よ？」

「ありがとうございます。部長」

「？」

全く分からぬが、茜が話してくれるようなので、黙つて聞く事  
にした。

「まず、本筋から言つて、あの公園でね。昔殺人事件があつたんだよ」

「は？」

イキナリ全く予期しなかつた言葉を言われて竜は頭が真白になる。

殺人事件？

殺し？

公園で？

浮浪者？

「殺されたのは山下 知帆。知るに船の帆で チホって言つんだよ。  
当時15歳だった」

「ち…チホ？」

その名前に一瞬ドキッとする。字は違うが、ウチの「チホ」と同じ名前だからだ。それで、昨晩西は「千穂」に名字を聞いたのか…。

「竜君の妹さんと同じ名前だね。当時、知帆はとある男性と付き合つてた。1年前のあの日、彼女達はあの公園で討論になつたらしいわ」

それで、逆上した男に殴り殺された。

痛ましい事件である。犯人の男はそのまま逃走して行方不明らしい。

「動機は分かつていなが、多分別れ話が拗れたのかも知れないね」

「ああ、その話だつたんですか。結構騒いでいましたね。当時僕の学校でも話題になりました。美少女殺害つて見出しで。とても可愛い人だつたらしいじやないですかその山下つて方」

今まで黙つて聞いていた小山少年も話の内容を知つてゐるようで、口を挟んできた。

「犯人の名前は確か「矢崎 良平」でしたよね。当時18でフリーターだつたらしいですけど」

そんな事をつらつらと話しだした小山少年に、少し啞然とした様に見る茜。

「そ……そんに有名だつた？」

「ええ、僕の周りでは。そりいえば親友のコメントが新聞にありましたよね。ええと確か名前は……えつ！？」

思い出すように天井を眺めていた小山が弾かれた様に茜を見る。

「火鳥……茜……。そりか、火鳥先輩だつたんですね……」

「……うん。チホは私の幼稚園からの親友……。当時良く彼女の相談に乗つてたのよ」

そこまで聞いて、彼女の昨晩の反応が納得いった。親友を殺された茜。その時の彼女の心境は分からないが、悲惨だったのだろう。

「茜ちゃん…。『めんな。俺が変な事言つたから…。嫌な事思い出させて…』

「う…う…チホ…」

竜が優しくてうつ言つのを堰<sup>イハ</sup>を切つたように泣き出した。

「火鳥君…」

部長も火鳥の背中を叩いてやりながら、一緒に泣きそうな顔をしている。

「結局、どういう事なんでしょう?」

一人、平常通りの小山は話を続けよつとしている。

「…小山君。君は人に冷たいと言われた事は無いかい?」

「はい、良く言われます。どうしてなんでしょうかね?」

本気で分からぬといつた顔をしている小山を呆れてみながら、茜に「大丈夫だね?」と声を掛けて気を取り直して話を戻した。

「小山君…。まあいい。草原君。問題は君がその犯人の顔を見たかもしれないという事なんだ」

「犯人を見た事?」

「そうだ。実はこの事件の犯人は、その矢崎という男とされているが、確証が無いらしい」

「そ…そんなん茜ちゃんの発言とかあるんとちやうんですか？」

「いや、それだけなんだよ。他に彼女達が揉めているような現場を見た者が居なくて、状況証拠だけでは犯人の特定が出来なかつたという事らしい」

「…「うん。チホはいつも一人つきりになると人が変わつたようになるつて言つてた…。だから普段は仲の良い恋人達だつたんだよ」

「それで、犯人と思われる人間「矢崎」は失踪。確かに怪しいが、それだけでは警察は動かない」

「なんやねんなそれっ！ 無能警官ばっかりとちやうんかっ！」

「どんなに証拠が無くとも、一人の少女を不幸にした男を野放しにしておくほど腐っているのかこの国の國家権力は。憤りを感じたが、こればっかりは一介の高校生の力ではどうしようも無い。ただ、庶民は怒るだけしか出来ない。」

「まあ、彼等が無能というより、それだけ彼女の事を知る者が居なかつたという事だろう。山下さんは、友人は火鳥君。両親は居なかつたらしい。そこで…。草原君。君にお願いがあるのだが」

「なんですか？ 人探しとかするんですか？」

「近いね。今から守矢公園に行つて、念写して来てもらえるかな？」

「ねんしゃ… つてはあつー? 出来ませんがなそんなん!」

「サイコメトリーが出来れば出来そつな氣もしたんだが無理か」

「出来へん出来へん! それにそのサイコメトリー言ひとも自分から出来へんですよ?」

「やうか。残念」

本氣で言つていたようだ。明らかに落胆してみせてくれた。

「なり、シリシリシリ」

そんな事を言つておいて、部長はとりあえず現場を見に行こうと提案した。陽が落ちてからでは観察するのに支障があるという事で、今度の土曜日に現地集合するといつ事で決定した。

それまでに茜はEVAの事について調べるとこ。小山少年は現場の付近の聞き込み調査。部長はそれらのバックアップらしい。そして竜は…

「とりあえず寝て夢を見てくれ」

寝る事が仕事なのは赤ん坊の時以来である。

部屋へ行くと、布団が用意されてすぐに睡眠薬を投げられたりした。怪しい実験体のようだ。

そして気持ち良く目が覚めると決まって部員達の落胆と嘆息が出来てくれる。

時折、部屋に誰も居なくて、横に保科が潜り込んでいる事もあつたが、それは御愛嬌。

その次の日に『新聞部部長ベットイン？相手は噂の転校生』といふ「？」が異様に小さく印刷された三流週刊誌のよつた記事が出たりして保科を追いかけまわしたりした。

そして週末になつた

草原 竜の章 第9話 「非現実」

4月9日(土)

PM1:28

守矢公園内

「では、諸君。これより不思議研究部野外調査を行う。各自作業に当たつてくれ」

「ラジヤー」

「了解です」

「はいはい」

「ほい」

「イエッサー・ボス！」

初めから部長、竜、小山、茜。

それと、普段来ない田代が欠伸混じりに答えたり、半分部員のような物な保科まで居た。

勿論、全員普段着だった。竜は青のトレーナーにジーパン。茜は緑色のブラウスに白のシャツで、下は白パンという少しボイッシュな感じだった。

部長はコートに変な帽子を被っている。

小山は何故制服だった。

田代は、まだ寒いのに薄い茶色のシャツ一枚で、保科は何を勘違  
いしたのか「スロリチックのドレスだった。

昨日まで聞き込み調査を行っていた小山によると、矢崎という男  
は仕事もせずに、一人暮らしだったそうだ。

彼が住んでいたアパートの管理人が言つには、何やら怪しい男達  
と付き合つていて、周囲の住人達から煙たがられていたらしい。

山下嬢と知り合つた経路は分からなかつたが、彼女やこの守矢公  
園の裏手の山にある、神社の神主の娘だつたらしい。

神主らは2年前に死去。その財産と土地は親戚が引き取つて山下  
嬢も引き取られたという事だ。

それでも、その親戚とは上手くいつていなかつたらしく、彼女も  
数日帰らない事が多かつたという事らしい。

その間や矢崎のアパートに泊まつていたのだろうか。そして、山  
下嬢もその頃から少しおかしかつたという。

「意味の分からない事を言つて時折その親戚を困らせたらしいです  
ね」

小山が茂みを搔き分けながら言つ。

一年以上経つている現場を調査と言つても、その間に立ち入り禁  
止になつてゐるわけでもなく、人の入つた痕跡がいくつもあつた。  
ジューースの缶や、お菓子の袋、何やら「ム製の輪つか等…。それを  
拾い上げて首を傾げている茜。

「これなんだろ? 輪「ム?」

「あ…茜ちゃん…」

全員が溜め息をつく。

「なあ、部長こんな事しどつても何も出てこないへんのぢやいます?」  
調査といつより、公園のゴミ拾いをしてるボランティア部のよ  
うな気がしてしまつ。

「そうですね。そろそろ本題に入りましょうか」

「本題?」

部長は縞模様のツバの短い帽子を被つていた。これでパイプを咥  
えたら勘違いしたシャーロックホームズのようだ。もちろんコート  
は着ていなくてただのパークーだつたが。

「そこ」の中央の木にしましょう。草原君サイコメトリーをお願いし  
ます」

「はあ?」

部長はそう言って、公園の中央の一本の木を指す。

「スズカケの一種ですね。プラタナスという広葉樹です」

小山もゴミ拾い作業を辞め、公園の中央に隔離されている大きな  
木を眺めながら言つ。

「期待はしていませんよ。ただ、木に手を当てて感じてみてください  
い」

笑つてそう言う部長の田はキラキラと素敵に輝いていた。これが期待していない田なら、彼はポーカーが上手いだろう。その隣を見ると、茜と小山も同じような顔をしている。保科、田代は相変わらず変な顔だ。

「その馬鹿がそんな事出来るのかよ」

「あら？ 出来たら素敵よ。妖精も見えるかしら」

一人纏めてドロップキックを極めたい衝動にかられながら、部長に言われたように木に手を当ててみる。

自分達より遙かに長い年月此処にあつたであろう木は、手を触れると少し暖かいように感じた。そういうえば、木の皮の下に住む虫といつのが居るが、防寒としては相当賢いやり方だと思う。寒さを防げてしかも、根から栄養を絶え間なく送ってくれる。

春の週末。六人はただ公園の風を感じていた。木々を揺らす風の音が静かな公園を通り過ぎる。竜が木に手を当てている間、他の者もそれを静かに見ていた。

「……」

「……」

「……」

「……何も起こらないじゃねーか」

「……黙つてなさいよ」

田代と保科だけは静かじやなかつた。

そして竜は

「……」

何してゐるやう?

思いつきつて冷めていた。

「な～。やつぱりダメやで。分かつたんはこの木が暖かいゆーべら  
いや」

そう振り返つて言おうとした。振り返つてから違和感を感じて声  
は実際には出ていなかつた。何が違うのか分からなかつたが、部長、  
小山、田代、保科4人がこちらを見ていなかつた。

「ん? どないしたん?」

4人の視線は竜の後ろの木に集まつていた。

「?」

疑問符を浮かべて竜も見るが、そこには別に変わつた様子は無か  
つた。ただ、先程手をついてみた時と。

「なんなん? え? ちょっとアンタラビないしたん?? 薙けや  
ん?」

「うん？ どうしたの竜君？ ってアレ？ 部長？」

茜が部長を引っ張る。しかし、彼はピクリとも動かなかつた。

「え？」

その隣の小山、田代、保科も同様に瞬きもしていな。これは

「…止まつてゐる。」

茜の咳きに竜はハツとした。つい、時間が止まつてゐるやつだ  
人は動かないのだ。竜と茜を別として…。

「な…なにこれ…。竜君どうなつてゐるの…？」

「そ…そんなん俺が知りたいわ… それに何で俺と茜ひやんは動いてるんや？」

問い合わせた答えが分かるハズも無く、茜はただ混乱したように部長達を揺さぶつてゐる。

《や… や… す… か》

「…茜ひやん」

「…こ？ なあこ？」

「いや… 茜ひやん何か言わんかつた？」

「え？ うん。竜君に何と言つてな」

何か聞こえた気がした。

「 もうすか? って聞こえたんやけど…」

「 着越すか? 」

『 … い… ます… もう… すか』

「 … またや… ? いますもうか? 」

「ええ… ? なーになーにい ? なんの暗叩? 」

「 知らんわ ! 何か聞こえたんや ! 茜ちゃん何も聞こえてへんの  
? 」

風が鳴つてこゐるが、ザワザワとこゝり感じな音が声に聞こえた?  
そう思つて耳を傾けると「ゴーゴー」と風が強くなつていたぐらい  
で何も聞こえなかつた。そうしている様子を見て茜は顔をしかめて  
いる。

「精神病の末期症状なのかな…」

とても小さな声で茜は酷い事を言つてゐる。

「ん? 草原君どうしたんだい? 」

そうしていると部長達が動き出したようで、田をパチパチさせてい  
る。こちらが先程の場所から瞬間移動したように見えたのだろう。  
交互にプラタナスの木とこちらを見返していた。

「あ、ぶちょー戻つて来たんですね！」

「…戻つて？」

「なんやしらんけど、アンタラ止まつとつたで？ パントマイムみたいに」

「あ？ 何言つてんだ？ アホだろお前」

「アホちやつわい！ 莺助お前だつて止まつてたんやで？」

「くつ」

「ひづりの言葉に失笑する田代だが、部長は頭の横を押されている。

「なるほど。それは本格的に超常現象だ」

「え？ …ああ、サイキック収容が発生したんですね」

「ノイズはどうなつたのか分からないがね。火鳥君言われた通り勉強したようだね」

「えへへ。任せてくれださい」

分からぬい話を交わし出した部長と萬。良く分からぬといった顔をしてこると、部長がこちらを向いて笑つてくれる。

「竜君は無意識にトランクス状態になつたようだね。そもそもESEAを発揮した瞬間から時間という概念は無くなるんだよ」

「は？」

「まずは……何処から説明すれば良いだろう…。そうだね…例えば透視。目の前に壁があつたとして、その向こうの映像を見る事は普通は人間には出来ないだろう？」

そして部長は手に一枚のカードを取り出した。

「これを茜君の理論を元にすると超時間の未来、または過去にこのカードに書かれている物を見る可能性がある。それを時間と空間を飛び越えて見る事が出来るのが透視だ。…今「飛び越えて」と言つたが、実は此処に時間の概念が無いとどうなるだろう？ 知覚出来る物は、物体からのノイズ、そしてそれから発信された情報がチャンネルを通して収容器に収まつて、脳に伝達される」

「……よう分かりません」

竜はそう呟いたが、部長はそれを無視して続ける。

「この物体から読み取るというのがサイコメトリーだと考へるなら、時間という物の概念がなくなつても不思議では無いと思わないかい？ まあ、私は透視も、予知も、サイコメトリーも同じ物だと考へているけどね」

「はあ…」

何となくだか分からなくも無かつた。実際そういう現象に身をいたので、素直に受け入れる事が出来たのだろう。

「しかし、これはそういう能力を肯定した場合の理論で、否定した場合は過去に知っている事が、再生されただけだと思う。『デジヤブだね』

「ええーー部長！ そんな事言つても実際に…」

茜が批判の声を上げる。全面的に超能力の存在を信じている彼女としては当然の反応だつた。だが、やはり部長はそれを聞かず指を立てて言つ。

「しかし、それを証明するものが無いだらつ。私が言いたいのはどちらにしろ彼の…草原君の能力を証明するまでには至らなかつたと…」

「そ…そない言われたかて…。俺としては…」

「デジヤブを感じるような精神状態の時に、時間が止まつたと感じても不思議では無いだらう。これが君の言つ「時間が止まつたような状態」の証明では無いだらうか」

「…」

そう言わてしまつたら反論のしようが無かつた。今まで起つた不思議な事は、確かに竜の心が不安定だつたから起きた事かもしない。

遠く離れた土地から来て疲れていた。

良く分からぬ少女と共に、暮らすよつになつた事での動搖もあつた。

新しい学び舎には変な奴と変な部活が始まった。

そういえば今朝の母の様子もおかしかつた。

それらの不安が一気に襲い掛かり、精神が乱れたとしても何も不思議が無い。自分はそんなに弱い人間では無いとは思つてゐるが、無意識にではどうなのかは知るよしもない。

その後、一応全員でもう一度付近を調べてみたが、結局何も発見出来なかつた。竜と茜だけが感じた不思議な現象も部長の弁で、証明され以後は話題には上がらなかつた。

「それじゃあまた、明後日部室で」

「またな」

「またねー」

「さようなら」

それぞれが帰路に足を向けた時には既に陽が暮れていた。

薄暗い公園の中で、茜と竜の一人は居た。

「じゃあね」

諦めきれず最後まで残っていた茜も流石に暗くなってしまったので帰ると言い出した。何か気になつて竜も木をもう一度触つてみたり、色々な所に目を向けてみたが、何も変わった事は起きなかつた。

「ああ、茜ちゃんまたな。風邪引かんように『戻』いつけ帰り！」

「うん。 ありがと『ひ』じゃあね！」

それでも元気良く走り去つていいく茜を田で追いながら、竜も家路を辿る事にした。ゆっくりと歩き出すと、公園の入り口に人影があつた。

「…？ うわあつ…」

茜の悲鳴。見ると人影が茜に組み付いているようだつた。

「…」…「らあ…何しどんねんつ…」

急いでわちうに駆けよつとするが、その前に人影が倒れた。

一つだけ。

もう一つはすぐに走つていぐ。その人影の手にはキラリと光つた物が握られていたようだつた。

遠田からでも分かつた。倒れたのは茜だ。

「茜ちゃんー！」

「つゅ……ダメっー！ 追つてー！」

顔だけ上げて叫ぶ茜の顔が赤く汚れていた。

「茜ちゃんー？ 何処怪我したん！ はよ病院にー！」

「「「メン。 刺された…くつ…。 私の事はいいからはやく…早く追つてー！」

茜は気丈にも笑つてから、すぐに真剣な顔をして人影が去つて行つた方を指差す。

「あ…アホかい！ 病院行くのが先やー！」

「ダメなの！ 今の…矢崎よー！」

「ー？」

「早く追つてー！ でないと…「う…」

「茜ちゃんー！ 茜ちゃんー？ クソつー…どないしたらええねん…」

茜を抱き抱えながら、近くの公衆電話を探したが見当たらない。携帯電話が普及した最近では工数電話の設置数も減つていると聞くが、こいつの場合はそれを恨んだ。竜は携帯を持つていない。

「あれ？お兄ちゃん何してるの？」

そこに明るい声が響いた。薄暗いそこに光明が差したと錯覚した  
ぐらいだ。

「千穂！ なんで此処にあるねん！ … って今はそんな事言つとる  
場合やない！ ちょっと茜ちゃんを頼む！ 病院連れてくから…」

千穂は言われて一瞬訝つたが、足元に横たわる茜を見て瞬時に状  
況を察してくれた。

「この人…この前の人だよね…。お兄ちゃん私が見てるから早く病  
院に電話して…」

「分かつとる！」

一先ず茜を千穂に任せ、公園の周りを走る。

ジユースの自動販売機がすぐに見つかるが、そこには電話ボック  
スが無かつた。竜は焦りながらそこから見渡すが、近くに公衆電話  
は無むそだ。

「しゃーない！ 一大事や！」

竜はそう叫ぶと、近くの民家のインター ホンを押す。

「すんません！ すんません！ 怪我人が！ 電話貸してください  
！」

インター ホンの音が搔き消えるぐらいの声量で叫ぶ竜。その内イ  
ンター ホンから「はい？」という声がして、竜はまた激しく叫んだ。

「すんません！　電話貸してください！　友人が大変なんです！」

熱を上げる竜の声量が納まるのを待つてから、インターホンの声は落ち着いた声で

「はあ？　訳分からない事言つてるんじゃないわよー。警察呼ぶわよー？」

「怪我人や！　警察でも何でもええから呼んでくれー！」

「怪しい訪問販売だつたら間に合つてますー！」

「ちよ……ちよつとー。アホかこんな時にそんなんあるかいー！」

「…………」

苛立つて抗議するが、それきりインターホンから何も聞こえてこなかつた。

「……なんやねんつ！　ホンマこいつのモンは薄情なんばつかりかいっつー！」

勢い余つてインターホンを殴り壊したくなつたが、此処で本当に警察にお世話になつたら手遅れになるかもしけない。そんな事を考えながら竜は元来た道を戻る。

「西ちやん携帯持つとるやろか…」

近くに公衆電話が無かつた時にまずそれを確認するべきだつた。己の無能さを恨みながら、竜は公園の前まで戻つた。

「お兄ちゃん！ 救急車は何時くるつ？」

千穂はこいつらの姿を確認すると、すぐに聞いて来た。竜はそれに手を振つて答えて茜の側に座り込む。

「？ お兄ちゃん？」

すぐに茜のスカートを触つてみる。何も硬い物は無い。

「お兄ちゃん！？ こんな時にセクハラ！？」

「ちやうわい！ 携帯探しとるんやー！」

「携帯？」

「ああ、千穂も探し！ 近くに公衆電話無かつた」

「つ…うん… つて電話？」

女には隠す場所が一杯あるのよ？

そんな保科の言葉を思い出した。特にカバン等を持つていない茜に、携帯を入れる場所はスカートのポケットか上着のポケット以外思いつかなかつた。それ以外にポケットは無い。それ以外に隠す場所と言えば…。

心持ち膨らんだ二つの胸の間とか…。

「そんなトコにあるわけないやん！」

自分で突っ込みながらも、カッターシャツのボタンを上から外す。4つ程外すと、茜の白い肌と下着が露になつた。そこで気付いたが、腹部を刺されたようで、それより下半分は血で汚れている。

「お兄ちゃん！ 何してんの！」

茜の胸元に手を入れようとした時、何か硬い物で千穂に殴られる。

「こんな時に何してるんだよー！」

「ち…違つわい！ 携帯隠してないかと…」

「そんな所に隠すのはどうかの怪盗だけだよー！」

「不〇子？…って千穂それ！？」

何か硬い物だと思つたら、千穂の手には携帯電話が握られていた。

「うん？ ああ、これ私のヤツ。持つてたの忘れてたよ！」

「あほあおー！ はよ出さんかい！…」

竜は急いで千穂の手からそれを奪うと、病院に電話する。

それから1~5分程で救急車が到着。竜と千穂も乗り込んで、茜はすぐに車内で応急手当を受けて、近くの病院に運ばれた。

PM7:49

神葉病院

そのまますぐに手術室に運ばれる茜。

「1)家族の方?」

手術室の前で待っていると、少し老けた看護婦が現れて、心配そうにこちらの顔を覗き込んできた。

「いえ、友人です」

「そう。貴方も酷い顔よ。少し横になつた方がいいわ。ウチの海洞医師は優秀な外科医だから安心して」

そういうと看護婦は優しく微笑んで、手術室の近くにある待合室の椅子に毛布を持ってくれた。千穂の方はわりかしと元気で家に電話していくようだった。

「お兄ちゃん。お母さんが学校に電話して聞いて、茜さんの親御さんに連絡してくれるみたい」

「そつか…。千穂もお疲れ…ありがとうな」

横になりながら礼を言つ。あの状況で取り乱さずにしてくれた千

穂に心から感謝した。見た目は少し抜けているように見えたが、意外にしつかりしていたのには驚いた。

「ううん。言つてなかつたけど、私、茜さんは前から知つてゐるから」

「ん？ そつなん？」

「うん。友達だつたんだよ。昔ね」

「……そう……なんか？」

数日前に一人が対面した時にの茜の反応を見ると、どうも面識がないように感じたが、千穂がそう言つのだからそうなのだろう。本人も忘れているのかも知れない。

「茜さんはね。ずっと、あの公園に来てたんだよ。一年間毎日……」

「ふーん」

聞きながら疲れが出たのか眠くなつてきた。欠伸混じりに耳を傾ける。

「あの日からずっと……茜さんは自分を責めているんだよ。チホを止めなかつたのは私のせいだ！つて……」

「ああ、お前と同じ名前の子が亡くなつたつて事件のヤツな。聞いたで」

「……うん。同じ名前……。お兄ちゃん……。ううん。竜さん。変な事言つようだけど……」

「ん？」

急に呼び名と口調が変わったので、眠い目を擦りながら体を起こして千穂をに向き合ひ。

手を揉みながら、千穂は下を向いていて前髪で顔が見えないが、口元だけ見えた。

「私が死にそうになつたら……茜さんみたいに助けてくれる？」

「は？ 何をいつとんねん？」

こんな時に何を言つのだらう。呆れた声で聞き返すと、千穂は唇を噛むようにして、もう一度聞いてきた。

「助けてくれないの？」

「……冗談はヤメえ。そんなん考えたくあらへん」

「で……でも……」

「ええか。千穂。お前はもう家族やで？ なんでこうなつたか理由はわからへんけどな。初めて会つた時な、あの時お前に会つて新しい土地で暮らすつていう不安が少し薄れたんや。そして、今日こんなに頼りになつてくれたんや。お前はもう家族やし、友達や」

正直な気持だった。素性の知れない彼女と出合つた事は少し不安だつたが、彼女が自分を無条件に慕つてくれた事、家でも、学校でも少なくとも一人じやない事。

不満は無い。感謝の気持は一杯ある。

自分の事を兄と呼ぶ事も完全に了承した。

「そつか…ありがとう…」

「…なんでそんな事聞くねん。照れくさいやないか」

実際照れて、毛布を頭から被つた。

「それじゃ、全部話すね」

静かに咳く千穂。

「全部?」

毛布に包まりながら声だけ聞いていた竜は、その声の真剣さに余計に毛布から出れなくなってしまった。

「あのプラタナスの木はね。ずっと昔からあるんだよ」

「は? 何言って?」

イキナリ木の話をした千穂に訝って、意味が分からなかつたので聞き返すが

「聞いて?」

「は?」

激しく言われて黙るしかなかつた。

「木はね。色々な思いで育つんだよ。早く大きくなつて欲しいとい  
う思いに葉を揺らして答えたり、悲しい事があつた時は優しく微笑  
むんだ」

「……」

何を言つているのか分からなかつたが、千穂の声は今にも泣き出  
しそうに震えていた。

「ずっと…見てたよ。茜さんが泣いているのを…。でも、私は動け  
なくて…。慰める言葉も知らなくて」

「…私は？」

千穂はその声に答えず続ける。

「チホさんが…死んだ時も私は見ているだけだつた…。何も出来ず  
に…。動けない事が、こんなにもどかしいと思ったのは初めてだつ  
たよ」

「千穂…お前まさか…」

「うん。私は木…プラタナスの木…」

「……」

静寂の中に千穂の声だけが響いた。

時間軸不明

「チホ……何で死んじゃつたの……」

「…………」

「私達親友だつたでしょ?…ビーフिंグちゃんと話してくれなかつたの…。ううん…ちゃんと私が聞いてなかつたんだよね…」

「…………」

「矢崎は逃げたって…。それ以外は分からぬの『メンね…』

「…………」

「チホ…私どうしたらいいのかな…。貴女が居なくなつて一人ぼつちで…どうしたらいいのかな…」

「…………」

「うん…。友達出来ないのは私が悪いんだと思つ…。でも、どうしても友達出来ないんだよ」

「…………」

「オカルトってそんなに気持ち悪いかな…。私は私だよ…」

「…………」

「チホ…どうして死んじやつたの…」

「…………わたしはここだよ」

「チホ…わたし…」

「…………居るんだよ」

「私も貴女の後を追うね…」

「…ダメ!アカネヤメテ!」

「私なんか生きていても仕方無いもんね……チホ……今いくから……ね」

「アカネダメ！」

「……え？」

「アカネダメダメ……。私は此処にいる……。ずっと貴女の側に居るから……」

「チホ？……チホなの？」

「ウン。ずっと一緒に居るよ。私は田の前に居るよ……」

「田の前！？ 何処！チホ！」

「田の前のその……プラタナスの樹に……」

草原 竜の章 第11話 樹の願い

4月11日(月) PM0:25

神葉病院・103号室

「…………ん…………は?」

私が目を開けると白い天井が見えた。

「?…病…院?」

そこは個室の病室のようだった。自分を見ると点滴のチューブや呼吸器等がいくつも繋がっていた。

「お。茜ちゃん田覚めたんか?」

「あー…ナースコールするわー!看護婦さーん」

「え? ?」

ベットに横たわったまま横を見ると、竜君とちーちゃんが椅子に座つて何か言つている。頭がまだ朦朧として良く分からなかつた。ちーちゃんはナースコールが何処にあるのか分からなかつたのか、外に出てしまつた。多分、私のすぐ後ろにあるのこ…。

「茜ちゃんー田間田覚めんかつたんやで?まあ良かつたわ

「2日…間?」

呼吸器が邪魔で上手く発音出来なかつた。しかし、竜君はそれをちやんと聞き取つてくれたみたいで、ウンウンと頷いている。

「せうや。…これもチホのおかげやな…」

「チ…ホ…？」

「ああ、チホ言ひてもウチのチホやけどな」

そうこうと竜君は少し寂しそうに笑つた。

「茜ちやんが集中治療してゐる時の話なんやけど…」

竜君は何処か遠くを眺めるよひて語つた。

・・・・・・・・・・

語り終わるのを待たずに私は、呼吸器を外して点滴の針も抜いた。

「茜ちやんー。」

「竜君。心配かけてゴメン。もう大丈夫だよ

呼吸器を外して少し苦しかったし、針を外した所から出血しているけど、私は寝ていられなかつた。

「よつ……わつ……」

ベットから滑り落ちるように降りると、スリッパを履いて外に向かおうとしたが、すぐに足に力が入らなくて倒れてしまった。

「茜ちゃん！？ムリしたアカンつて！血い一杯抜けたんやから！」

「でも！…私行かなきや」

竜君は私を支えてくれながらベットに戻そつとするけど、それを押しのけて私は言つた。

「公園へ…守矢公園へ…竜君お願い…連れて行つて…」

「…チホちゃんの所やな…分かつた。いこか…」

竜君は分かつてゐるみたいだ。良かった。

「「ゴメンネ…」

そうして竜君の肩を借りながら、私達は守矢公園へとゆっくり歩き出した。

引きずられるように竜君に運ばれながら、私達はやつと公園に着いた。殆ど背負つようにしてくれたので、竜君は大分息が切れていった。ありがとうね、竜君。

「チホ…」

いつの間に切られていたのだろうか？

そこにあつたプラタナスの樹は切り株になつていた。

私はそのプラタナスにすがるように抱きついた。

「貴女にまた…助けられたんだね…」

「千穂…」

竜君がもう一人の「チホ」の名前を呼んでいたようだつた。

あの日、茜が手術室に居る時の話だ。

森川千穂は告白した。

自分が人間では無い事を。

そして、自分が木の精で、茜の友人のチホの記憶を読み取つて実体化した事を。

茜はあの日、とても危険な状態だった。そして、手術室で…一度死んでしまった。

しかし、それを救つてくれたのが「千穂」さんらしい。彼女の生命力を全て使って…「奇跡」を起こした。

「竜さん…。私は茜さんが助かるなら命は惜しまないよ。…元々…無かつた命なんだから…」

「千穂！…でも！」

「折角竜さんとも仲良くなれたのに…ちょっと残念だよね…あはは…」

竜は毛布から出る。…しかし、そこに居るハズの千穂が見えなかつた。

いや、半透明で確かにそこに「居た」

「竜さん…生まれ変わりって信じる？…今度生まれ変わったら人間がいいな…」

「ああ！ 千穂は今でも人間やん！ 何言ひてんねん！」

竜は涙が流れるのを構わず千穂を抱き締めようとすると、その手は空を切ってしまう。

「……ありがとう…。竜さんお願ひがあるんだよ。最後のお願い

「…なんや？」

涙をトレーナーの袖で拭つて見上げた。

「生まれ変わつたら…友達になつてね」

そういう終わると…。千穂の体は完全に消えてしまった。

「…それは違うで千穂…」

誰も居なくなつた部屋で一人、冷たい床を叩いて崩れる竜。

「生まれ変わつてもや…………それに……竜さんやなくて、俺はお前の  
お兄ちゃんやで…」

その1時間後、茜の手術は無事終了し、後は彼女の生命力に掛け  
るといつ事になつた。

4月11日（月）PM1:35

守矢公園

「信じられないよね……」

「そやな……」

プラタナスの木の切り株に一人は座り込んだ。

「チホ」への礼を済ませて急に疲れが出てしまったので、2人共後数分は動けない感じだ。

「結局何だったんだるうね……」

「…全部夢やつたんとちひょうか？」

「夢？」

茜は自分のお腹に巻かれている包帯を指差して笑う。

「これが？」

「……」

「矢崎には逃げられたんだよね。ちよつと口惜しいなあ

「そやな…でも命あつてのモンや。一応警察に届けたんやから、後は捕まつてくれるんを願うだけやな

あの日の後、竜は事情聴取を受けた。顔は見ていないが、被害者の証言 茜の証言 を元に調査をしてくれるらしかつた。一度逃げられているので何処まで信用して良いか分からぬが、素人が口を出す事は出来ないので仕方ない。

「でも…夢だつたら素敵な夢だよね」

「怪我してて素敵もなんもあらへんやろ」

「これはこれだよ。チホと会えたんだから私は満足だよ」

「チホ…か…」

森川千穂、いや、山下和帆との事は、竜と茜一人の思い出となつた。風が吹いても消える事の無い、大事な思い出と…。

「生まれ変わつても友達になるつて約束したんやチホと…」

「そつ…」

プラタナスの切り株。あの田を境にこの木は枯れてしまつた。そして役場の者が、腐つて倒れる前に切つてしまつたらしい。

「生まれ変わるんやつたら早よしてほしいなあ。お爺さんなつてからやつたら遅いで」

「何言つてるんだよ。竜君。生まれ変わつてすぐで何処かで産まれてるんだから、もう〇歳だ

よ」

「そ……うなんか？」

「ナリだよ。10年もすれば何処かですれ違つかもしれないね」

「……10年か……」

その頃の自分を思い浮かべてみる。きっと就職して頑張って仕事をしているのだろう。この町に残るんだらいいか？

出来ればこの町で就職したいと想つ。龍はこの数日でこの町が好きになつていた。

『……まさか』

「……まさか？？」

「うん？ どうしたの龍君？」

風がざわめいていた。

「いや……何か聞こえたような気がしたんやけど……」

『あ……えないの？』

風が急に強くなつた。その風が木々を揺り、ザワザワとこの音が強くなつた。

「……聞こえたで……」

「ん？　ん？　どうしたのホントに？」

茜は首を傾げて、龍には分かった。風が葉を揺らす音…、  
それは「声」に聞こえたのだ。

『よかつた…。聞いたんですね』

「ああ、よつ分からんけど誰や？」

「え？　ええ？　誰と話しかねの龍君？」

『私は…今貴方達が踏んでる木です』

「わつわつ…？」

驚いて飛びのく龍。そのまま茜も手を引いて立たせる。

「わわ？　何？」

『すいません。ええと、貴方達の彼女への想いを受け止めました。  
これを授けよつと思いまして』

木切り株は少し緊張感の無い声でそんな事を言つにきた。

「やあやあ…」

『手を出しつください』

「手…」

竜が言われた通り手を出すと、その上に一枚の葉が現れた。

「ええつー？ 何何？ 竜君マジック？」

茜には全く「声」が聞こえていないようで、終始竜の奇行に驚いている。

「葉っぱ？？」

『それを使えば…「彼女」は戻ります』

「つ…使つにしても…ゲームちやうふんやから…」

『…それを、持つて祈つて下さい…』

「祈る…」

「ねえねえ！ 竜君！ 精神病の末期症状なのは分かつたからどうしたの？」

酷い事を言われて流石に茜の方を向いて説明する。

「今座つとつた木がな、コレ使えばチホが戻つてくる言ひ方さや」

茶色い今にも崩れそうな枯葉を振り、茜に苦笑してみせた。

「えつー？ 木の声が聞こえたの？」

「祈つたらええらし…茜ちゃん」

「……うん。分かつた竜君一緒にやろう」

「ちいさの言葉を西は信じてくれたようだ。竜の手を包むようにして、目を閉じた。

それに倣つて竜も目を閉じて祈る。

『戻れ』

一人は一心に祈つた。疑いも無く祈つた。この公園には普段人があまり来ないが、人が通りかかったのなら変な一人だつただろう。しかし、そんな事は一人共構わなかつた。ただ、「彼女」が戻る事を祈り続ける。

「…………」

「…………」

「…………」

クシヤ！

「……なんも起こりんやないか～～！」

竜は激昂しながら葉を握りつぶした。元々乾燥していた葉は粉々に砕けてハラハラと手から零れ落ちる。

「お…竜君騙したなー。」

茜は頬を膨らませて拳を挙げてきた。

「いやー…俺やなくて他の木に言つてくれやー。俺知らんて  
つ」

「そんなのに言つても、私は反応分からなによー。」

もつともだ。

「ケンカしちゃいけないよー」

「そ…やで！千穂の言つ通りやケンカはアカン…え？」

「……」

「お兄さん達ケンカしちゃだめだよ。…ふえ？ ビーしてこっち凝  
視してるの？」

声がした方を見ると、少女が居た。見た感じは普通の少女で髪型  
も普通のストレートだ。

「チホ…？」

茜は目を丸くしてその少女を見る。しかし、千穂とも和帆とも似  
ていなかつたようで、すぐに溜め息をついた。

「…じゃないみたいね。貴女だれ？」

「ええ？ 私は私だよ。名前は……アレ？ なんだつけ？」

少女は腕を組んで必至に名前を思い出そうとしている。

「は？」

「うーん。思い出せない……でもお兄さん達は覚えてるんだけどあれれ？ 何処であつたんだろ？」

なるほど。彼女はやはり「生まれ変わり」のかもしけない。自分の事は分からぬが、竜達は覚えているといふ。この娘は「チホ」の生まれ変わりなのだ。

「何処に住んでるかも分からへんねんな？」

「ふえ？ うーん……そういえば私何処から来たんだろ？ はこゆう」

「……」

「茜ちゃん。この娘やつぱり生まれ変わりみたいやな」

「え？……なるほど。やつか……」

茜も得心したように、笑顔を少女に向ける。姿形は違うが、この娘は一人の大事な思い出の結晶だ。

「それやつたら記憶戻るまでウチ来たらええよ。ウチ家の部屋空いとるから大丈夫や」

千穂の部屋が空いている。母にはどう説明するか悩んだが、どうにかなるよつた気がした。

「ええ？ 竜君大丈夫なの？」

「ああ。千穂は前からウチの家族やからな

「でも…姿違うんだよ？」

「なんとか…なるやろ」

娘を得た時の母の顔を思い浮かべると、上手くいきやうな気がする。

「ええと…いいのかな？」

少女もとまどいながら、しかし、記憶が無いが、何故か知っている者の側に居る事を望んだようだ。照れながらも竜の手を取った。

「ふつつかものですが～お願いします」

「あはは。調子良いねこの娘」

「そやな しかし、名前無こと困るな」

「あつー！それ考えたんだけど、薰でいいよ」

「カオリ？」

「うん。おおいたおやかな薰」

「よつ分からんけど、それでええんやつたら…。ほな、薰行こか

「うん」「

「あ…竜君。私も病院に戻るね。一応抜け出したから怒られそうだけど」

「あ、大丈夫なん?」

「うん。大分落ち着いたから一人で行くよ。じゃあまたね」「茜は足取りがやはりフラフラしていたが、倒れるような事は無かつた。その足取りは何かが吹っ切れたようにしつかりしていくよう見える。清々しく空は晴天だつた。

「ふう。ほな行こか…」

その後姿を見送つてから改めて薰の手を取つた。

「うんうん。おねがいします」「

手を取られても全く嫌な顔もせず、薰は逆に笑顔で握り返してきました。

「ほな、行くわ…またな…」

「?誰に言つたの?」「

「気にせんでええ」

竜達が去つた後の公園。一陣の風が吹いて、その風は声となる。

《私の子を…よろしく…竜さん》



PM2・16

草原家

「了承します」

「は？」

家に帰つてきて、母の顔を見たと思ったら、イキナリ母はそんな事を言つた。

「その娘行く所が無いんでしょ？ 見た瞬間に分かつたわよ。千穂も居ないし特に前と状況は変わらないでしょ？」

「あう…ええと、よろしくおねがいします。薰と言います」

薰がぺこっと頭を下げた。その頭を撫でて母は優しい声で「はいはい」と言つて笑つている。

「ちよつちよつ待つてや？ なんでオカン千穂おらんなつたって知つてるねん。それにこの娘が行く所無いって分かるんや？」

竜は当然の疑問を母にぶつける。

「…貴方ももう知つたんでしょうけど、私は初めから知つてたってたように家族に迎え入れた。

「…貴方ももう知つたんでしょうけど、私は初めから知つてたって

事よ

「はー? オカンそれはどうこいつ

「ほらほら、薰つて言つたわよね? 「記憶が戻るまで貴女はこの家の家族だからね」

竜の問いかけに母は一瞥だけするが、薰を抱き締めた。

「は…はうう~ありがと~お母さん」

「あらあら情報処理が早いわね~。頭の良い子は好きよ~ じゃあ、先にお風呂にしましょ~うか、洗つてあげるわ。貴女ちゅうと臭いわよ~

「ええ? …あ~うひょ~ヒダ~口臭い~

「そうね、じゃこきましょ~

母は何故かとても嬉しそうに薰の手を引いて浴室に向かつ。

「…ひよ~! 俺放置!~?」

「放置」

それだけしか答えが返つてこなかつた。

流石に浴室まで行くわけもいかず、竜は訳の分からぬままその場で頭を抱えるのだった。

4月15日（金）AM7:45

神葉町

「あの日」から4日後

「おにいちゃん…………ん！」

春の町並みに元気な声が響き渡る。

「ん？」

その声に振り返って、欠伸混じりにその姿を確認して、竜はまた歩き出した。

「ああ～！ 無視！ おにいちゃん！ 先に行くし、無視なんて…  
私の事嫌い！？」

元気に走つて来るが、あまり一人の差が縮まらない。竜は早足で歩いているからだが、それでもその者の足は遅かった。

丁度守矢公園の前まで来て、竜は伸びをして立ち止まつた。そこには桜の木が、風に揺られて花びらを舞わせていた。足元はピンク色の絨毯のようになつていて、

「花は散るから美しい…なんて言つのもキザやな」

ふと気になつて、入り口の方からプラタナスの切り株を見る。昨日見たままの姿でそこにある切り株を眺めてから、後ろを振り返ると、少女がやつと追い着いたようで、肩で息をしながら座り込んでしまつていた。

「ふうふう…はーやーいーよおー…」

追い着いた少女はあからわまに頬を膨らませて抗議した。

「花は散るから美しい。とか言つけどそれは「みている人の主觀」で、散つての方にすれば美しいなんて言つてらんないよ?」

「……」

「ん? 何見てるの? お兄ちゃん?」

返事が無い事に訝つて、竜の視線を少女も追つた。そこには切り株がある。その少女が生まれた場所だ。

「…よくおぼえてないけど…。私あそこから出でてきたんだよね?」

「ん? …ああ、そうやで薰」

千穂の生まれ変わりの少女は、やはり千穂と同じ年らしかつた。生まれ変わったばかりなので0歳なかもしれないが、見た目からして大体15ぐらいだと母が言つていたので、やはり同じ学校に通う事になった。

学校へ行くと、不思議な事に誰も「千穂」の事を覚えていなかつた。そしてやはり薰の担任は下々原 美奈先生だつた。

「これはどういう事だろ？ 矢崎の事件は、流石に傷害事件として、警察が、今も追跡中みたいだが、それ以外のフシケンの野外調査の事等誰も覚えてなかつた。

茜と竜以外は…。

「ねえねえ。お兄ちゃん」

「なんや？ 薫」

「伝言？」

「伝言？」

「うん。伝言ええと言つよ？」

「うん？」

「ありがとう だつて」

そう言つて薰は今度は一人で元気に掛けて行つた。

「……」

声も出せずに涙がこぼれた。

「 いやいや…… ありがと… 千穂… 」

そして、竜は涙を制服で拭つと顔を上げて歩き出した。

季節は春。これから暖かくなつていいくのだろう。

俺は一人じゃない。

これまでも、これからも… ずっと心の中に彼女が居るのだろう。  
そして薫が、茜が、田代が、  
部長が、小山が、保科が…。

竜の不思議な事件は始まつたばかりである。

春の日差しを受けて、青々と茂る木が一本あった。

その名はプラタナス。

どこにでもあるような木だ。

木は一人の少女の少年の出会いを彩った。

木は感謝した。

その出会いを大切にした少年を。少女を。

木は一人の少女と少年の悲しい別れを彩った。

木は一人の少女と少年の再会を彩った。

木は喜んだ。やはり出会いを大切にした者の心に。

ずっと木は待っていた。人との触れあいを。

何故だろう?

寂しかつた?

ううん。

何故だらう？

憧れたんだよ。

何を？

人の心に憧れたんだよ。

何故？

ずっと悲しそうに泣いている少女の心に触れたから。

何故？

ずっとその少女を思う私を知ったから。

誰の為の奇跡だったの？

奇跡？

奇跡でしょ？

そうなのかもね。

やつぱり夢？

夢かもしれないね。

覚めてしまつの？

それは貴女次第。

うん。 そうだね。

大好きな人が出来たから。 それだけでも良いんだよ。

そうだね。

じゃあ、またね

うん。

私の子をよろしく

私の子もね

うん。 わかつたよ。

～

「で、結局どうなったの？」

不思議研究部の部室で西と龍は居た。

「なああんも分からへん」

「何だよそれえ～」

「何だよ～って言われても説明出来へんやろ流石にこんな変な事…」

「そんな事言つたら今回の発表どうするの？不思議事件だよ？立派な」

「……西ちゃんは公表したいんか？」

「……正直迷つてゐる」

「ほひな。ええやん～つべひこ分からへん事あつても」

「そんなもんかなあ？」

「そんなもんやね～」

「じゃあ、今回ほいれでこの事件は終つて事だね」

「今回ま……つてそんな何回もあつても困るんやけどな……」

「へへへ言つたでしょ？此処ら辺一体はパワースポットに

「もうええで……」

竜は心底疲れたようにテーブルに突っ伏した。

「それじゃ、次回は海かなあ～」

茜が何か言つているのを聞き流しながら竜はそのまま眠りに着いた。

【プラタナスの樹に… 草原 竜の章 完】

『わたし…まだきえたくない』

to be continue . . .

## 草原 竜の章 ハピローグ（後書き）

これにて終わりです。

続きがありそうな終わり方ですが、基本的には無いです。

他の作品など <http://9922.at.webry.info> にて公開しておりますのでよろしかつたらお願ひします。

ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7094d/>

---

プラタナスの樹に…

2010年10月28日06時57分発行